

# 大日本地震史料

## 卷之二十

安政元年十一月四日  
五日二大震ノ二

〔續地震雜纂〕

○京都地震、但し此書付は、飛脚所本屋勘兵衛方へ、京都より内々書狀也、

今四日朝五ツ半頃、地震にて、暫時に相濟候心得に罷在候處、中々左様に無之、誠に、長々こゆり、中程に而は何と成行と存、只々神佛祈念より他事無之、漸々鎮り申候、誠に町中一統不殘表江出向、餘程長く皆々顔色違ひ、不存寄候事に御座候、噂には、六月よりまだ、嚴敷と申噂も有之候得共、何れ歎損じ候向も承り不申候、伏見邊同様之趣、又大津邊は格別之事も無之候噂に候得共、慥成儀は承り不申候、加茂川東西にては、餘程輕重有之候沙汰に御座候、川西程嚴敷と申噂に御座候、然るに晝過壹度、又八ッ過壹度、是は表江出かけ候迄に、ゆり止み申候、何分晝中は宜敷候得ども、夜分はごふぞ御ゆるじ被下度事に御座候、就ては宜敷沙汰は不申、色々噂許、頼と困入申候、何分靜謐專一奉祈念候、只々伊勢許拜み申候、此段鳥渡申上候、

右書狀は、四日地震早速、差出し候書狀也、當地に而は七日に寫取、

安政元年

○永田惣助、大坂方之書狀、十一月五日四ツ時、

當月三日朝、道中無難、當地着仕、乍憚御放念可被下候、

終日

大西風、四日、朝殊に長閑、晴天風、折昨四日四ツ頃、存外之大地震、私なし、地震後、西風に相成申候、

儀、北御堂近邊歩行仕居候所、暫時之間は往來出來兼候位、當夏之地震よりは、震ひ様子は穩に候得共、凡半時許之間、休みなしに震ひ申候、當地人之咄に、當夏よりは、大分強き方と申候、少々づゝ破損所御座候、則板面摺壹枚相調へ差上申候、破損所多分破損は、古き家に御座候、三四ヶ所は、私共見請申候、四ッ過小一震、八ッ過小一震、夜九ツ時小一震、五日朝六ッ前中一震、先只今迄は、右の通に御座候、今朝大坂へ到着の者に承り申候處、其者は、彼の矢走乗船中、何事も不存、大津江上り候處、餘程の地震之由に而、人々取騒ぎ罷在候趣、少々之破損(はカ)も御座候よしに御座候、又南都近在尼ヶ辻、通行致し居候と申者に承り申候所、是又浪花同様之由に御座候、御地の様子は、いまだ不相分、如何に御座候哉、深心配仕居候儀に御座候、下略、

十一月五日、四ツ時認、

永田惣助

○橋村氏家來、大坂方同家江書狀、十一月七日認、

同十一日夜着、

大坂安治川滯船中、三日切を以、一筆致啓上候、隨而拙者共儀、去る四日、當地地震後、急便を以申上候、持船安治川へ下

震災豫防調查會報告第四十六號

乙

げ、翌五日も逆風に付、滯船致し居候所、同日夕七ツ半頃、又候前日の通大地震、船中は爲差事なく、世間の事而已案じ居候處、早速相鎮り、其後如雷、何方ともなく鳴ひぶきしが、夜五ツ頃、川下を騒敷相成、津浪ぞと呼り候聲とともに、波高く、思も不寄大船、追々川下を登り來り、行合當り合、乗居候船は、岸より少し放れ居候處、前後左右船許にて、船子ども、或は表を防ぎ、或はこも、面揖、取揖、無油斷相働、銘々共は、或は船子に加勢、或はかこくも神を祈り奉りなご致し候内、少々鎮り候處、船方之差圖にて、取物も不取敢、船傳ひに而丘江上り候處、又候大地震、前々兩度方も強く、いづれも心中に神を念するより外は無御座候處、無程鎮り、川筋も漸穩に相成候に付、一先船江乗候得ども、尙此後難計とて、何れも身を固め、腰兵糧用意いたし、又候上陸、丘にも地震の用意に而、家毎に表江席を設け居候事にて、其中へ交り、乍帶刀平坐に居並び候さま、近邊之騒動之様子杯、軍場も如斯ならむと、互に語り合杯致し、明方を待許に御座候、其内人の噂に、六甲山崩れ候也との事に付、夫故の高波ならん、雷鳴の如くおぼへしは、其音なりしにや、されば最早別條も有間敷とて、曉七ツ時、歸船仕候、乗居候船も少々は損じ候得ども、障りに相成候事は無御座、少し茂別條無御座候事に

て、いづれも大慶仕候、右銘々共荷物に至迄、無別條出船し、差支にも相成不申段、乍慮外御休意可被下候、右騒動之節、安治川橋落候由申候得共、夜中は篤と不分、夜明也、後見候處、北之方三分通り残り居申候許に而、橋柱迄も無御座候、銘々乗居候船は、右之橋を半町許下に繋ぎ居候が、其所に大船之帆柱倒れ浮び、船の破れなど浮び、橋のやぶれなども浮び居申、是は汐の勢に而大船江持かけ、雙方破れ候事と致愚案候、右落橋之節に、人の損じ夥敷とのよし、右大船は、二千石許之様子に存候、木津川筋龜井橋茂右同様之由に御座候、其外破船、人損じ等、夥敷候得ども、筆紙に盡しがたく、是等は飛脚屋あたりより、委細御承知可被成下候と存、略し申候、拙者共の様子、無異之段申上度、如斯に御座候、昨日は逆風歟、なにかごさくさにて滯船、六日は逆風故滯船、天氣次第、出帆可致、いづれ九國着岸の上、目出度可申上候、

十一月七日

田付楠太郎

増山 尙輔

大竹右藤太

田付 仲

村井佐兵衛様

山本隼太様

追而只今も少々地震御座候、○唯今承り候得者、六甲山の事は虚言之よし也、

○大坂山本屋伊兵衛書狀、十一月七日出す、

當月四日、御地震に而以之外大變之由、承知仕、嘸々御驚可被遊御儀奉存候、

一當地も同日大地震に而、人家潰れ申候程の儀、尙又翌五日申之刻大地震の上、暫時して暮過頃大汐さし込、小船に而川中へ遁れ出候人、右大汐に而大船數艘、火急にさし込、橋を落し、小船を敷き潰し、人損じ甚多く、大船小船共損じ、道頓堀、金屋橋より下手、橋無之様相成、木津川筋、安治川筋、何れも同様之仕儀に而、市中混雜、其上いまだに折々地震有之候而、人氣甚さだか成事無御座、別而市中の内、東邊は震ひ無數、西横堀より西は、殊の外あたりに而、人家潰れは西邊に多く御座候、就中、大汐の沙汰にて、西よりの商人は、商賣休み申候もの過半に御座候、右に付而は御地大變之事承り及、誠に以乍憚御推察仕候儀に御座候、

一下筋之様子も承り合申候所、下筋に茂地震は御座候得共、大坂方は輕き様子に御座候、何分此度は大坂表強く震ひ申候よしと相見へ申候、下略、

霜月七日

山本屋伊兵衛

○八日出、山本屋伊右衛門、同勘太郎書狀、

一當地去る四日辰下刻大地震に而、當六月よりは大分手強く相震ひ、驚入候處、同日八ツ半頃、少々、夜分に至り格別數も震ひ不申候、五日は先々安心罷在候處、七ツ時頃に大に相震ひ、其刻沖手の鳴候や、音も聞候様相心得、安心不相成、勿論昨日々之地震にて、町々に少し傾き申候所、古家などは潰れ申候所も邂逅には御座候由、併倒れ申候家は、數は無御座候、則別紙板行一葉、入御覽申候、怪我人、死亡は一向無御座候、宿元などは類焼後、追々家作相揃ひ申候處故、強く相震ひ申候而も、建具立附等、少しもくるひ不申候、

寺社に而も古き方、少々損じ申候、仰山に評判仕候程之儀は無御座候、

一五日七ツ時過、木津川口津浪にて、道頓堀、西横堀、大黒橋、但し道頓堀落橋五つ、長堀筋二つ、立賣堀筋一つ、こは龜井橋落、千石船不及申、大小之船々、

明地なく押込、所に寄川水面見へ不申候、幸町筋濱屋敷へ大船突込候所、少し有之、小舟に而地震を遁れ出候向々、却而大船に押敷れ、水死仕候者數多御座候様に承り申候、于今死亡人數は、一向承り不申、大小之船損じ、夫々西濱大

震 災 豫 防 調 査 報 告 第 四 十 六 號

乙

渡し邊は、大船川岸へ押付られ、誠に目も當られぬ次第に御座候、大丈夫の大船も押流れ、中に狹まれ申候五十石、百石之船は、(脱字アルニ似タリ)上荷、茶船は様々に相成、解船同様に潰れ申候、荷物積込候も在之、又は北國大廻船休泊申候も在之所、總崩れにて押登申候儀に御座候、安治川口は安治川橋落申候、其外は橋落不申候、安治川橋迄は、前同様大船押込居申候由、併天保山兩組御小屋は、臺所廻り、床の下五寸許迄、大汐さし込候而已にて、此方は死人壹人も無之、天保山續は大難儀と存候、船場も西北嚴敷様子、尼ヶ崎も大分潰家出來候風聞御座候、町々四ツ辻等、所々より丸太を以、大道へ筋違に足止を建、又は兩向へ丸太を以致用心候所も、彼是相見へ申候、

一四日夜々、火之用心御觸、并昨夜も流船荷物金銀拾ひ上候向、御奉行所へ訴出候様、若隱置候はゞ、嚴敷御咎可有之段、御觸有之、昨日西邊見廻に歩行仕候處、大黒橋御出役、其川筋御世話御座候様、見受申候、高汐にて難漕人は、施行可遣分も可申出旨、總年寄衆々被仰渡候、定而施行出候事と存候、四日四ツ前、五日七ツ時、大地震、夕四ツ時、六日、七日、兩三度づゝ、然ども少々之事、

一昨日飛脚々爲知來候處、御地も地震御同様に而、別而鳥羽、松坂、津表、津浪にて御家中屋敷流死人茂御座候由承り、

奉驚入候、下略、

十一月八日

山本屋勘 太郎  
山本屋伊右衛門

○十一月十日、足代氏家來笠木三治郎、從者御屋敷町榎本三右衛門、大坂方歸國に付、聞書、但し昨九日歸宅之由なり、

笠木三治郎儀、大坂用向相仕舞、讃州江立越候に付致乗船、木津川口にかゝり居申候處、五日夜六ツ時頃、其邊津波と申騒ぎ立候に付、見申候處、五日の月、薄曇りに而見へ兼候得共、大浪まゐり、大船小船押込まり、ともに押流れ押合、三治郎之乗船茂くだけかけ候故、次之船へ飛乗り、凡三艘ばかりも乗越々々致候處、但しいづれも着の身着之儘漸く大小のみ、何れの町に候哉、川岸に女壹人立居申候故、助け呉とよばはり申候處、女は逃去り、大之男壹人出きたり、其邊之土藏の圍ひ板の落たるを、橋にかけ呉、それを渡り、やうやく危き一命をたすかり申候、其上り候處は、北堀江五丁目にて、夫より旅宿江罷歸り申候得共、誠に着之身着の儘にて、荷物類をはじめ、不殘うしなひ候事故、私も寢着の儘に而歸國仕候、寔にその烈敷様子には、言語に盡しがたし、やうやく無難に一命をたすかり候ばかり故前後之様子覺へ不申候との事に候なり、大坂町方、其外之様子相たづね候得共、唯自分危難に逢候事ばかりに

而、その外之事は不相分、

○永田啓助、大坂より引返し歸國に付、聞書、但し十一月十二日着、

去る五日出書狀差出し候後、地震を恐れ、荷物類船江積込候處、五日夜六ツ時、大津浪にて、荷物積込罷在候船、打碎候得共、大船押込まゐり候節、幸に大船の上に覆り、荷物は不殘大船に打込候故、幸に荷物等無難御座候、

一大坂市中之者共、地震を避け、茶船等へ老人女子供等乗せ有之候處へ、大津浪に而、大小之船に狭まれ、茶船等碎け、人死夥敷、又橋之上等へ地震を避候ものは、大船帆柱之爲に橋落候に付、橋より落ち候死人も亦多し、此頃迄に死骸一ツ揚げ候得者、札坏建、所縁之者尋參り、宅へ引取送葬致し候得共、後には誰彼之無差別、川岸方直に墓所へ送り申候、其内には、乳母歎親歎、小兒を抱ながら死し申候杯も有之、誠に目も當られぬ有様、言語に絶し候、大坂死人、凡三千餘人と申事に御座候よし、

○大坂之人吳策肥前屋又兵衛書家、より、射和竹川氏江之書狀、

貴地如何と氣遣罷在候所、御細書江安堵仕候、夏も貴村は不甚由承り候、此度も比他所候得者、輕きと被察候、實に樂國と羨敷存候、當地は餘程嚴敷候、寶永此方之大變、津

安政元年

浪は誠に可傷事に而、是は道頓堀邊の様子、入御覽度候、死人は仰山に申候得共、眞實は四百人餘と申候、併其餘いづれ數十人あるべしと申候故、大抵五百人位は可有之、夫に而もけしからぬ事に候、船は四五石已上、千二百五十石、其以下小船に至るまで、千艘は破損仕候と、其役に携り候人之話に候、此失墜は中々仰山成事に而候、紀州も湯淺、其外田邊、南部、日高、鹽屋など、地震津浪に而大荒、田邊は出火、九分通り野原と成たると申候、エナ文字一村不殘波にとられ、人は壹人も不死と申越候、當年は何とてケ様に人を苦しめられ候事や、天道は是邪非邪と歎息仕候、當地津浪は先例も有之事、老人の説話を聞し歎、又は記録に而も讀居候人ならば、決而溺死之患はなく候得とも、畢竟不學文旨ゆゑ、地震後海の響雷の如くなるは、巨浪の兆なることもしらす、舟に乗たるは、扱々不心得なる事可憐候、夫に付而も、書は讀ざるべからざるものに候、

一黒船一件も稀有之事に候、併何も不騒とよき事なるに驚き、仰山、今にも軍の起る如きゆゑ、人心大に騒擾いたし候、僕は、

孤船何能得起軍、休勞防禦事紛々、請看羶虜歸仁澤、

旗上大書皇國文、船上揚以本邦假字、記其國號旗、故云、

○在大坂竹川源七より、射和竹川氏江之來書之内、  
當地阿治川口流船大小船百七十二艘、荷茶船六十艘程、上荷  
船三十艘許、水死五十壹人、木津川口大小船五百九十九艘、  
上荷五百六十六艘、茶船六十九艘、死人三百四十壹人、

○紀州若山加納氏々、伊丹中村孫四郎江之來翰、十一月十日  
地震之事御申越、實にけしからぬ事に御座候、抑當國之海岸  
諸村、或は七八分、或は半分、或は三分一、津浪にて流失、田  
邊は大火に而千軒餘も焼失、奥熊野より伊勢江かけての荒  
は、委細には相分り不申候得共、本庄内遠江戸行に伊せ田丸  
にて四日朝の震に逢候よし申來り候、彼邊も大荒と存候、阿  
州徳島出火、沖より能々見へ候よし、家數二三千も焼候との  
事に候、此節材木買に船數艘來り居候、讚岐高松も大荒に候  
事、材木や申居候、三備藝州邊も荒候由、當地は四日朝より  
は、五日夕方之震ひや強く、屋敷の土塀過半崩れ候、其夜  
は各假小屋に而明し候、拙宅は小高き地に御座候間、西濱邊  
を津波を恐れて逃來り候者數多にて、其夜は三拾人許、中に  
は孕婦もあり、大丈夫めきたるものもあれど、各泪ぐみて、  
(に脱カ)今も溺死すべき勢に見へ、翌日も直に滞留して居るものも  
あり、飯食等之事等、何角大取込、小屋も大夫に造りかへ、筈  
葺にいたし、漸昨日取拂ひ申候、津浪を恐れて山手へ小屋が

け致し候もの、病根に一子をとられ、其防ぎに參り候ものも  
手疵負も有之候歟、洪波高、海濱は拾六間許と歟、虚言のや  
うにさへあきれ居候也、

○十一月十日出、伊丹中村孫四郎書狀、

扱去る四日、五日稀成大地震、大驚仕候、御地は如何御座候  
哉、志州鳥羽邊大變之よし風聞仕候間、定而御地も同様嘸  
嘸御驚と奉察候、先々拙宅は幸に別條無之、怪我も致し不申  
相遁れ候間、乍憚御安意可被成候、は浪華は誠に大變、五  
日夕津浪打寄、千石餘りの大船、一時に押登り、安治川、木津  
川筋大騒動、橋々數多落碎け、道頓堀大變に而、大船に河岸  
之家押潰し、今以大騒ぎ、一軒之内々、五人七人の葬式をい  
だし、死人幾千人といふ事をしらす、老若男女手足なきもの  
やら、首許の者やら、追々船の下地中坏より掘出し、實に目  
も當られぬ位の事、其混雜筆紙に難盡、千日寺、梅田などは、  
晝夜葬式打つゞき候よしに御座候、黒船又々土佐沖に又三  
艘相見へ候よしに而、大坂川口御奉行大心配、紀州公御手當  
國々々人數用意の風聞、實に世も盡果ぬる心地、イヤハヤあ  
きれ返りたる事のみ、珍事天變、一時に押寄申候次第、早々  
平穩之事のみ祈念仕候、伊丹に而茂、いまだ野邊に皆々假屋  
を作り住居致し居候者も有之候、四日より晝夜今以少々づ

つゝの震ひ有之候、赤穂も同様大震ひ津浪に而、御城御殿向、家中屋敷、大破と相成申候由申來り候、地震は大坂邊よりも強きよしに御座候、御地之御様子承り度候、下略、

十一月十日

中村孫四郎

○伊丹中村孫四郎が再度之書狀、十二月廿五日出、

伊丹茂大震ひには候得共、格別破損の家も無之候、併少々つづがみ候得共、潰れ家などは一軒も無之候、尼ヶ崎は餘程潰れ家も數多有之候よし、西宮、灘、兵庫、今津邊は、津浪もなく、地震も當地同様の位のよしに御座候、併誠に稀成大地震、實に消魂仕候、今以折々少々づゝ震ひ申候、下略、

十二月廿五日

中村孫四郎

○備前岡山吉野屋平助書狀、十一月十五日出、

當地も去る四日朝五ツ時過、引續五日夕七ツ時地震烈敷、大に心配仕候、併私宅に於ては別條無御座候、今以日々一兩度づゝはゆり申候、當地町方はさしたる損じも無之、在方は多分損じ居申候と承り候、

○橋村家來内海只輔、讚州が書狀、十一月七日認め、同廿三日着、

下拙儀大坂出立、道中船中都合克、去る朔日多度津いせや江着仕候間、御安意可被下候、然ば一昨五日七ツ半時大地震、

安政元年

翌六日又々大地震、今以少々づゝゆり申候事、相止み不申、去る六月十五日、國許に而逢候よりは、又々餘程強く、丸龜始近村多分家倒れ申候、當伊勢舍近所も少々家潰れ、壁杯落候家は數多三野郡、豊田郡の様子も篤と分り不申候得共、當地同様位之よし、豫州川之上邊も餘程強きよし、左候得ば和田濱邊も定而少々潰れ家も有之候やと奉存候、

十一月七日

内海只輔

山本隼太様

御披露

猶々申上度事共も數々有之候得共、此書狀認め候中も、度度ゆり申候得ば、彼是心配、何事も申縮候、下略、伊勢舍之壁も落損じ候、昨日が近村江地震見舞に出かけ、今日も丸龜へ見舞に罷出候積りに御座候、昨日地震にて火事大混雜、皆々假屋をかけ、野宿致し罷在候者、六月國許同様、扱扱當年は困り入候年柄は、六月十五日之が餘程強きが兩度、五日夕、六日朝、其間は少々づゝ今にゆり申候、高松邊は又々強きよし、只今に而は遠村之様子、篤と分り不申候、何分恐しき事、地鳴は度々、寔に薄氷を踏み候心持にて罷在候、御察し可被下候、以上、

同別紙、

震災豫防調査報告第四十六號

乙

書狀認め罷在候得者、七日正四ツ時又々大地震、伊勢舎は屋根は本葺、ごだいなし、礎江直に柱立有之、別而ゆり、壁は大  
半落、當惑此上なし、御察可被下候、此上如何相成候や、大心  
痛仕候、以上、

○内海只輔再度之書狀、十一月廿四日出、

扱大坂大地震、津波之趣、來田新左衛門様家來中村將作殿、  
當月十九日丸龜江着、國許之様子、大坂之様子、委細承り、驚  
入申候事に御座候、當方之儀、去る七日船便を以申上候通、  
四日朝五ツ時分地震、格別強き事は無之、五日夕七ツ半時  
大地震、六日、七日同様、今に少々づゝ震動有之、心配仕候、  
乍併日々軽く相成申候、當地も餘程嚴敷候へども、國許程は  
潰家無之候、多度津は軽く、一軒も潰家無之、伊勢舎有之候、  
新町村は強く、既に伊勢舎も倒れ可申と心配仕候處、かたぎ  
のみにて、倒不申候、丸龜は震動大に強く、潰家五十軒許、大  
破損之家凡千軒、高松御城下丸龜より七  
里隔つ、五六町家倒れ、御城之  
角櫓二ヶ所倒れ候よし、先讚州にては、高松御城下一番之當  
りに御座候よし、金比羅町無難御座候、和田濱は大分家損じ  
申候、美濃郡、多度郡在々は、格別家損じ無之候事、  
去る十六日、當國に而珍敷大雪、夕方々近年稀成大風、同日  
伊豫松山道古邊津浪之由、左候得者四國之中にも、讚州は一

番軽く、殊に下拙勤所は、格別潰家無之候、併五日之地震に  
は、大體家々潰れ可申と存候處、地震相應には損じ少く、悅  
申候、下略、

十一月廿四日夜認、

内海只輔

山本隼太様

御披露

猶々四國之中、土州大地震、津浪之由、阿州徳島邊同様、と  
りぐ噂いたし申候、

○大坂在留阿州藩之醫人宇佐美左門より、射和竹川  
氏へ來書、

阿州、土佐等は餘程之荒、兩方濱邊は格別之事、小生國許を  
使來り、其使之者弟は致乗船候、其船津浪に而被打揚、煙  
草一二ふく之間流候様存候處、夜明候て乗組壹人見へ不  
申、餘は皆々無難、然る處元之船繫居候所々五十町許、村  
村を打越、陸地江上り居候而今に致方無之、其儘に仕置候  
趣に申候、是は實事故奉申上候、  
一平戶様之内に而承候、壹岐國は無入島同様に成候由、此節  
世上に而申候者、御同家は迄之古借、無利足百年賦、當時  
に有之分五十年賦、尙又差當り五萬兩被仰出と申事に而  
候、



一德島は大荒潰多上へ、稻田九郎兵衛、賀島出雲兩家屋敷九  
 焼之上、家中、町家は類焼、壹軒も残り家に無之、又残り家  
 に無事成は無之候、南之方津浪にて別而大荒、十五六里之  
 間甚敷、東西由岐を始皆無成申候、撫養、小松島、焼又は潰  
 等に成申候、齋田鹽場、皆潰に及申候、  
 諸湊破損夥敷、北方灘受は新田之向々、都而及大破申候、  
 所に寄小壹萬響破、其間へ家或は人、犬等落込、死候もの  
 も有之候、

淡州も大體同様震候得ども、先輕き方に御座候、下略、

○阿州城野内參宮人之話、

小松島は地震後、或は出火、或は津浪にて、漸八拾許残り候  
 由、

德島は地震後津浪參り候とて、瀧の山へ逃上り申候處、出火  
 にて内町千軒餘焼失致し候、

北方上山などは、仔細無御座候との事、

○福井氏家來桑原朔二、阿州德島宅元へ之書狀、  
 十一月十一日、

扱道中無難に而、十月廿八日夜大坂致着、同所用向も三日に  
 而相仕舞、十一月二日大坂出立、西宮泊、日々大風に而兵庫江  
 三日夜泊、四日は樽見へ參り候處、九ツ頃迄存候頃、地震有

之、又候五日滯留之處、七ツ過頃大地震長くゆり、驚き濱邊

へ出居候處、暮方に鎮り、其夜は兩三度もゆり候得共、表江

出候程之事なく、翌六日風静り浪なく候故、岩屋へ渡り、直

に苧屋迄乗船致し候處、右苧屋は、彼五日之地震嚴敷候て、

數人濱邊に小屋を建、壹人も家には居不申、恐入候事、志築

江參り候處、同様にいよいよ、行先嚴敷と被存候、且又鹽瓦

中筋道筋は段々崩れ、大荒に相見へ申候、又々福良は船場故

に、津浪にて皆々山へ小屋を建、壹人も居不申、甚以難儀致

し候而、松廣江參り候而、誠に荒家同様之處へ一宿、翌八日朝

鳴戸乗船、無事に相渡り申候、岡崎へ參り候得ば、右も同様、

此處も彼津浪にて人家流れ、毎度之宿相尋候處、是も山へ皆

皆小家を建居申候、食事致し候處なく、堤治兵衛殿へ相頼、

山の上の小屋に而麥飯を食用いたし候事、右に付德島に人

足に參り候者なく、段々相頼み、漸出來、德島迄貨錢拾匁に

而相頼申候、德島に暮六ツ過着致し候得者、

五日大地震に而、内町分大荒、大火、

○稻田九郎兵衛様、  
壹萬參千石屋敷  
壹萬石屋敷  
 ○加島長門様、右兩家不殘燒失、○通町壹

丁目、貳丁目、三丁目、不殘燒失、○新し町壹丁目、貳丁目、參

丁目中程迄、○八百屋町、中町、紀の國町、右三町不殘燒失、

○紙屋町三町、不殘燒失、○横町は残り申候、家數凡千軒餘、

號六十四第告報會查調防豫災震

乙

人損じ死人貳百人餘り、いまだ眩とは相分り不申、誠に徳島は大騒動、新町分は地震許りにて、出火はなく、不殘皆々金比羅の山へ逃登り居申候、又は廣場には小屋を建、夫々居申候者も在り、中々筆には盡しがたく候、○海部郡○那賀郡濱邊之處、津波にて流れ、殊に國中端々迄大損じ、又○小松島は千軒之所、大地震之上大津浪に而流れ候人家多く、漸々三拾軒許残り申候事、○上山筋と申候神領村之高根と申處、山抜けに而三町四方崩れ、人家數知れず大損じと申事、先荒増申遣し度、我等三人とも、十一月八日に無事に徳島着致し候間、此段御安心可被下度候、(衍カ)下略、

十一月十日

桑原朔二

○土佐高知、失出津浪之事、(火カ)

此書付者、大坂表土州舟宿を土州持之師職中へ達し之覺書也、

城下上町、堺町を南、種崎、浦戸、岸和浦、赤岡浦、

右は無事に御座候、

城下下町北方、南朝倉町、北は山田町、東茶苑場、西は廿代町、其外農人町、蓮池町、播摩町、北奉公人町、種崎浦戸町、新市町、右之町々凡三拾六町、死人は三百五六拾人、潰家は千

軒許と申事に御座候、

かんの浦、

半分許流失、

宇佐浦、

皆流失、

手詰浦、

同斷、

須崎浦、

半分許流失、

屋須浦、

皆焼失、

畑中、

皆焼失、

下田、

皆焼失、

下りや、

同斷、

先は大略如此御座候、以上、

十一月五日七ツ時を大荒の次第なり、

○土州高知伊勢舍守を、安田由助へ來翰、十一月八日出、

扱當國に而も、當月四日より大地震に而御座候處、同五日七ツ頃より又々大地震、四日之ゆりよりひどく御座候所、下町は大火事起り、下町八九分通り焼失に相成り、死人、怪我等、今以其數相分不申、寔以近年之大變に而御座候、上町は地震許にて御座候得共、家々半潰、又潰家、此上もなき大變に而御座候、

伊勢舍の方も、重も家は堅固に御座候得共、壁、屋根等痛み申候、北庇も轉げ落飛散申候、土藏の壁も西側、北側潰、少し

許残り居申候、  
外輪は塀總崩れに相成、半分餘は相こけ申候、下略、

十一月八日

伊勢舍守  
松之助

猶々申上候、此度之大變に付、朝倉町杉村清太夫様、御神前其儘に而御座候得共、重も家は半潰れに相成申候、裏の方も半潰れに相成申候、唐人町之伊勢舍は、大抵痛み候得共堅固に御座候、

○大坂御藏屋敷へ参り候土佐飛脚が聞書、大坂々之來書之内、

覺

土州城下并浦々、大地震、出火、津浪之次第、十一月四日朝五ツ時大地震、翌五日申刻大地震、津浪に而、城下人家大崩に而出火に相成、

○東はさえん場々、 丸燒、

○同農人町、 丸燒、

○西は廿代町、 半燒、

○南は朝倉町、 丸燒、

○北は山田町、 丸燒、

其外

新市町、 丸燒、 蓮池町、 丸燒、  
播磨屋町、 同斷、 京町、 同斷、  
細工町、 同斷、 新町、 同斷、  
種崎町、 同斷、 紺屋町、 同斷、  
上町大損じ、御城御家中、少々損じ、凡人家二千軒許燒、凡死人二百三十拾人許、凡町數三拾町燒、  
○原本、コノ次ニ燒失ノ町圖ヲ載セタリ、今略ス、  
其外浦々大津浪、

甲の浦、 八步流、 安喜浦、 地震に而 八分崩、

千結浦、 丸燒、 屋須浦、 丸流、

赤岡浦、濱邊百軒許、 流る、 種崎浦、濱藏皆々、 流る、

浦戸浦、出火、津浪、 少々損じ、 宇佐浦、 丸流、

須崎浦、 七分流、

はた郡、

中村、出火、 丸燒、 下田浦、 丸流、

下のかや、 丸流、

はた郡并外浦々、委數儀は于今相分不申候、今日迄に御飛脚兩度参り候事、

十一月廿八日

于今晝夜地震六七度づゝ有之、夫も當地之此節少々有之候(カカ)得者強く御座候、潮も事に寄高く参り申候由被申候事、大

震災豫防調査報告第四十六號

乙

坂も一昨廿五日夜、一寸津浪參り候様、(射和カ)對利に而申居候事、唯々變事許に、心痛無限事に御座候、

○杉村清太夫、土州々同家宅許江之書狀、十一月廿八日出、大坂々十二月十五日出

十一月五日七ツ半時頃に、御國大地震、高知は殊之外大變、先御城内無別條様子承り申候、

一御家中上町、南町等家々損じ破れ候得共、倒れ家なし、

一向町一圓倒れ、其上所々出火、西は家中迄、東は新町中程迄、南は播磨町、浦戸町不殘、朝倉町半分程、北側下へ御藏

に而留る、夫々南は残り申候、

一茶苑場、不殘燒る、

一下知、壹軒も殘る家なし、

一津浪來り候場所は、家中下并に潮江村一圓、下知新町、農

人町一圓、北島邊、尙又江廻り不殘、今迄新田之所は、皆々

元之海と成、一旦引退き候得共、又々潮滿來り、日々於今

同様之事に御座候、乍併家は壹軒も流れ不申候、

一却而(崎脱カ)種浦戸、美滿瀨等、無別條候事、

一桂濱は不殘流失之由、其餘所々損じ候得共、傳承事故略

之、

一地震は此頃に至而も、一向不止申、潮等も却而其節方壹尺

餘も多分に滿、伊勢舍屋敷邊迄來り申候、

一近江は天津邊迄、日々潮床之上江滿上り申候、

一高知人死數、いまだ不知由、皆々近邊の山江遁行、御上方日

日粥并錢、壹軒に付八十夕宛被下、所々江假屋立、夫江居

申候、此頃は大分家に戻り渡世致し候様子に御座候、此度

之大變、實に如何相成候事歟、其有様筆端に難盡候、下略、

十一月廿八日

杉村清太夫

米田四郎太夫様

杉村母二様

○同人、土州々再度來翰、十二月十三日出、

然ば其御地も大分地震、津浪有之候趣、風聞御座候而、殊之外

致心配候、當御國は于今不穩、地震度々、潮はいまだ御家中

邊迄、江廻りは不申及、江口邊にも滿上り、一向引下げ不申、

先日同様之事に而、實に困り入候、乍併諸品米穀等、皆御役

所前に而被賣捌候事故、高直には相成不申、石百廿夕許に御

座候、伊勢舍假家、追々出來に相成、郷中は御檀廻相始め、町

方も少々賦初候得ども、一向行衛相知れ不申人許多、中々六

ヶ敷、又泰泉寺山、石淵山迄見通しに相成、藏は一ヶ所も殘

りなく成、其有様難筆紙盡、實に當年は何とも仕度なき事に

御座候、下略、

十二月十三日

杉村清太夫

杉村丹二様

○西岡篤三郎、大坂方之書狀、十一月廿八日出、

私儀出立之日廿二日は、馬都合に而雲津江一宿仕候、同夜曉七ツ頃は中地震、大に驚、其儘飛出し申候、夫々追々先へ参り候丈け、輕きよし承り申候、廿三日關江一泊、廿四日石部一宿、廿五日伏見一泊、廿六日晝船にて下り候處、晝八ッ過る頃歟、船底に響き、少々鳴動、人家之様子見候處、恐しき事と家を飛出し申候、相尋候得ば、大分之地震と申居候、折々微動は御座候得共、晝は歩行、夜は臥居申候得ば、しれざる位之事に御座候、

福原貫二様に御届もの持參、得拜顔儘に御渡し申上候、赤穂之様子相尋候處、大坂方は大分強き由、御城之塀大分損候由、殊に産物之鹽濱大損じ之由、併津浪にては無之、高汐と被咄申候、

豫州今治、早速御藏屋敷へ参り相尋候處、今治之者も仕合實地説承り候處、輕きよしに御座候、漸新地と申所、至而古き家壹軒潰れ、所々古き家之庇落候許之事に而、土藏等一向損じ無之由、津浪一切なし、少し隔候間、西條、小松は潰れ家土藏損等も御座候、松山は輕き由、久間は大分強き由に御座候、右之次第、御旦中無別條安心仕候、今治は四日之地震は

輕く、五日夕七ツ時之地震、六日朝四ツ時之地震強き由に御座候、中國之様子、種々風説のみにて虚實難計、通行見受候上、豫州方後便可奉申上候、下略、

十二月廿八日

西岡篤三郎

○橋村氏家來四人、大坂方之書狀、十一月廿三日出、

副啓、當地地震之次第、追々御承知被下候儀と奉察上候、國許に而承り候方は大に強く、居宅轉倒等、旅宿方東西南北には、漸歩行之節兩三軒見請候、旅宿西横堀方西は、餘程轉倒有之由に御座候、四日朝、五日七ツ半時地震、其夜五ツ時津浪は、殊に大變成事御座候、噂之通道頓堀芝居之近邊壹町許西へ、千石餘之船三四艘も打上げ、兩側居宅、右之船に而大に損じ申候、夫々川下に参り候程、甚敷荒候よしに御座候得ども、多忙参り不申候故、分り不申候、右津浪に而死人七百人許と申事に御座候、二千人三千人など申候得共、實は七百人許之由、是は四日朝之地震にて、當地に而も富家之老人女子供之分、地震を恐れ、茶船、屋形船等へ乗出し居候處、右之津浪に而大船に敷れ、溺死仕候よし、又川岸之家は、地震濟候て居宅へ入込居候處、右之津浪に而大船に家を倒され、家内不殘溺死致し候も有之候、是等は殊に不便成事に而、何とも申がたく候得共、富家老男女子供等、諸人之狼狽致し候を餘所に

震災豫防調査會報告第四十六號

乙

見やり、屋形船などに乘、遊川ケ間敷餘り奢候處、却而身を失ひ候者、一向に不便とも申がたく候半と風説仕候、

去る廿一日、大洲、宇和島藏屋敷見廻、佐野兵左衛門相勤候に付、彼地之様子聞合候處、宇和島屋敷木村市左衛門殿出會承り候者、去る四日、五日大地震、津浪に而、宇和島城下は不殘汐入候よし、去る七日出之早飛脚、十三日當藏屋敷へ相達し、早々江戸表江遣し候よし、怪我人、死人等之儀は如何有之候哉、其後之便に無之候故、如何と心配仕居候趣被申聞候、土

佐國大津浪之由、去る十八日、大津驛に而土州之早打に出會申候、土佐江並び候宇和島故、南海を受候分は、何れ津浪は參り候はんと奉存候、左候は、兵左衛門、吉右衛門兩人之勤所は、多分南海邊故、荒可申と兩人心配此事に御座候、大洲は

去る十日出之早船、漸廿一日藏屋敷江相達し候趣、大洲御城下も餘程震候而、御城隅櫓天守等破損致し候趣、郷中は一村に兩三軒許も倒れ家有之趣、長濱始内海に相成居申候故、津浪は參り不申候由、其内郡中は、重兵衛勤所、地震嚴敷、怪我人三十人許も有之候よし、三ツ濱邊は、重兵衛勤所、少々津浪參り候趣に御

座候、内之子は至而地震輕きよしに御座候、如何有之候哉、藏屋敷に今以再飛脚參り不申、遅々仕候は、善惡いづれとも難申心配仕候、九州も豊後國は大津浪之由風説仕候、誠に此

度之地震は、日本國中之事と奉存候、江戸表も大變之由風説仕候、此頃東海道筋、武家方往來都而無之、誠に淋しき事に御座候、全道中筋地震津浪等にて、往來絶申候事歎と奉存候、此頃は最早海上通路、平日之通りに相成候趣に而、何れも追々乗船致し候故、私共も乗船仕候、去月下旬國許發足之者も、日々西風強く、漸昨今東風北風に相成申候に付、皆々出船致し、私共は着岸之上、實否可申上、先當地之様子、荒増奉申上度、道中三日限を以、如此御座候、

十一月廿三日

高瀬重兵衛

田口吉右衛門

佐野兵右衛門

石田善作

○豊前小倉方藤田伊織遣し候書翰、

豊前大地震は霜月五日、六日、七日三ヶ日打續震候由に候得共、格別之大荒も無之、大體當六月、國許之地震位候由、西は長崎方筑後邊迄は大荒之由、別而豊後府内、其外所々温泉場所山抜いたし、死人、怪我人其數不知、大變之趣、先以豊前は格別之障無之、安堵いたし申候、中國道中筋に而も、今以微震之響難止、日夜震動有之、就中、霜月廿五日、防州室津に滯船之砌、朝五ツ前大地雷響き地震も有之、誠に大筒を打懸候

ごとし、地雷鳴動致し候、九州に而は豊後國第一番之大荒、筑前、豊前は至而穩に御座候、

十二月八日

藤田伊織

○榊原傳藏、豊後々書狀、十一月廿日出、

私儀海陸無難、霜月十九日豊後表江下向仕候、乍慮外御休意可被下候、然し當月四日、大坂大地震と承り候得共、私儀乗船後、船中に而一向不存、尤五日明石に滯船仕候節、晝七ツ半時大地震に而、驚入候儀に御座候、下筋中國、九州、七日迄三日之内は大地震、其外日々少々、豊後國は府内御城下鶴ヶ崎と申所、一圓家ゆり崩し、實に筆紙に難申上次第に御座候、乍去私共無別條相勤罷在候、下略、

霜月廿日

榊原傳藏

○射和竹川氏々、廣田氏江來書之内、駒之助、麗助等、明石に着候、三町前繩手道に而逢候、駕に乗り居候所、人足共駕ほり出し倒候程之事、加古川宿に而支度候所、其宿は皆潰と申候、明石も大潰、行々宿々やども潰れ、うら新座敷残り、其裏のはた中にて夜を明し候由、誠に危難は遁れ申候、下略、

○播州赤穂中村細石々、伊丹中村孫四郎江來書、十一月十

四日夕認、

扱當表四日四ツ時頃一震有之、五日七ツ半過頃大震に而、皆漸泉水湧上り、家も頭の上へ落かゝり候様に相成と覺へ、手足すくみ致し方無之候、併少々震軽く相成候儘、埋火其外火鉢之類江水打懸置候而、藪の中へ參り候處、海上鳴渡り、今にも洪浪一時に打寄候勢、男女老少大恐怖、御推察可被下候、矢多門西の町邊に而は、津浪參り候趣を申唱、子供之泣聲、實に大變之事と相覺申候、されども先づ其夜は大小震候得共、晚刻之程の大震も無之、竹中に一夜を明し、夜明候而罷歸候處、又候震出し候に付、藪の中へ近邊之者共寄集り、外山下に而は黒谷山、又は荒神山江參り、諸家中町共明放しに相成候、漸此頃には皆々本宅江罷歸り申候、併市藩とも宅大破損に而住居六ヶ敷分は、今以藪之中に住居罷在候、拙宅に而も八日之晩より裏八王子柿之本にかり庵を詰候而、十二日晚迄住居、扱々大恐怖之、世の中に此外御座有間敷と相覺へ申候、異船位之儀に候半ど、力のあらむ限り相戰可申見込も候得共、大震に而者いか成俊傑も、手足の不自由可恐事共に御座候、破損之荒増、左に、

御城内殊之外大荒、高塀三百間餘破損、御門御多門御櫓残りなく損じ、三重御櫓臺大損じ、御馬見所大損じ、所々御

震災豫防調査會報告第四十六號

乙

城内水高さ壹間程吹出し候、御馬屋頼母屋敷大破、御家中丸潰れ之家拾壹軒、何れ茂大屋敷也、其地殘らず半潰れ多し、

中にも拙宅は至而無難之趣にも被存、大慶申居候、併表門大損じ、玄關少々、門内瓦堀丸破、臺所口庇九分破、奥の袋棚少損じ、表部屋敷玄關、三寸程南の方へ出申候、本宅之方者二三分許づゝ立付開き候位に而相濟、實に上々吉と相悅申居候、御同慶可被下候、大坂表之様子、御申越之通死人多きも、天變地災とは申ながら、不平之儀に御座候、當地に而は怪我人は壹人も無之、先夫許之事共、今夕も町家江出見候處、今に往來之者稀に而、皆々閉切罷在候次第、御推察可被下候、四國丸龜大荒の由申唱候、岡山邊に而も、町家不殘切にして、人何方へ參り候や、買物等も出來不申、茶漬に而日困り入候趣、備前岡山方人參り話し之由、承り申候、山崎、安志方も見舞之使差越し、あの御方角に而は、格別之事も無之よし申越候、下略、

山崎も安志も播州なり、赤穂より十里東北に當る、

○同人々、再度來翰、十一月廿二日夕認、

今以當表には地震少々づゝ有之、海上度々鳴渡り、人氣不平之事共に御座候、夫故夜前も山手之方へ、町方之者立退候様

子、何分津波之氣遣に而、不平之事に候、御遠察可被下候、下略、

〔同書〕<sup>四</sup>

○四日市吉田千九郎が書狀、十一月十五日付、

一當月四日朝五ツ半時、五日暮方、兩度地震に候得ども、當夏より能地震馴候間、當地は近在とも、怪我人并に火事は一切無之候、家、土藏等少しは潰候方も有之候得共、多分之事は無之、乍去海面水鹽嵩、洪浪にも可有之と心痛大方ならず候得共、其儀も無之、無程波勢くぢけ、穩に相成候事故、少しは安心仕候得共、其後以今小さきみに震動仕候間、人心不安に候、何卒平穩に相成候様奉祈上候事に候、拙家儀、以御蔭一類無異儀、家藏とも無難に罷在候間、乍憚御安意思召可被下候、就而は貴地邊も餘程嚴敷震動仕候噂に承り候、下略、

十一月十五日

吉田千九郎

東海道筋大地震、

一江戸が小田原迄は、崩れ家少しづゝ在候由、江戸五日猿若町邊之處、五七町焼失之由、

箱根、

人家潰候處も有之、怪我人無之、



三島、

人家相潰れ、新町橋方出火、明神前傳馬町、久保町、三町程  
焼失、

沼津、

御城内崩れ、過半押潰れ、怪我人多由、

原、吉原、蒲原、由井、興津、江尻、

此宿六ヶ所は、不殘潰れ、通路難相成候よし、

駿河府中、

人家不殘潰れ、御城内崩れ、怪我人數多在之よし、

丸子、岡部、

人家少々づゝ潰れ候よし、

藤枝、

田中御城内、平一面崩れ、人家不殘潰れ、出火に相成、宿内

過半焼失、怪我人數多在之由、

掛川、

人家押潰れ、過半焼失、横須賀御城内、大崩れ之よし、

袋井、

人家押潰れ、過半焼失之よし、

見附、

人家押潰れ、怪我人有之由、

濱松、

人家過半潰れ候よし、

舞坂、

宿中之船々、數多打上候、人家潰れ過半、

荒井、

御關所崩れ、町方五六十軒程潰れ、死人有之よし、

二河、白須賀、

人家三四十家も潰れ候よし、

吉田、

人家二百軒程潰れ候よし、

藤川、赤坂、御油、

ヶ成に無難のよし、

岡崎、

橋々上少し潰れ、矢矧橋二ヶ所ひすみ申候由、

○吉良海邊通、小津浪に而荒多候よし、

鳴海、池鯉鮒、宮、

三五十軒程づゝの潰れ之由、海邊は小津浪のよし、

桑名々京都迄、

少々づゝ痛み、家潰れ家も少々御座候、

大坂、

震災豫防調査報告第四十六號

乙

餘程之荒方きびしく御座候由、噂に承り申候、

豆州下田、

數千軒有之處、凡津浪に而流失仕候よし、

○魯西亞船も水入、揖等大にいたみのよし、夷人十五人も溺死の噂に候、

甲州街道、

小佛峠々先は、甲府并に近邊七八十ヶ村程、潰れ候よし、

信州松本、

御城内大崩れ、出火に相成候よし、

野州、

宇都宮邊は潰れ家多候よし、

右之通承り申候間、一寸申上候、以上、

吉田千九郎

○十一月十三日、井村傳太夫、宮七里涉船中に而認候

書狀、

當月四日朝五ツ半時過大地震、私儀參州つくでと申所は、

鳳來寺々三里西に當り、善光寺并飯田道に而、田内宿と申

處に罷在申候、餘程ゆり強く、村々相廻り而も、皆々裏口

表口へ小家をこしらへ、大恐れに御座候、同日終日大小地

震二十四五度、同日夜に入同様、翌五日同様、六日に相成、

少々穩に相成申候、七日少々、八日暮後中地震、九日少々、

十日新城へ罷出候處、新城は無事に候得共、商賣留めに

て、辛じて宿を求め申候、同様五六度ゆり申候、十一日岡

崎へ無事に止宿仕候、岡崎にて漸入湯出來いたし、飯もたべ申候、

地震荒増寫し差上申候、右申上度、早々以上、

宮七里渡し船中に而

十一月十三日

井村傳太夫

東海道大地震實記、

一十一月四日五ツ時八分頃、相州小田原東海澤に而休居候處、強き地震有之候得ども、建家破損等之儀無之候、

一 小田原宿は少々強く有之候に付、町中へ小家拵へ、住居仕

罷在候得共、家損じ候程には無之、裏屋之龜家兩三軒倒れ

候由、虎屋藤右衛門之土藏は、壁少々はげ候を見請申候、

一 湯本村は小田原同様、強く震動仕候得ども、家損等之儀

は更に無之候、同所止宿仕候、

一 五日、箱根山道筋大小之石、數多嶺々拔落有之候得ども、

道中差支は無之候、箱根宿は、御本陣三軒潰れ、其外建家

不殘大破損に有之候、山中村者存外潰家は無之、家損多

く、殊に此邊々土地所々裂け居申候、並木は倒れ候者、唯

壹本に有之候、

一三島宿は、宿内壹軒も不殘潰れ、町中壹町餘燒失、又壹町許之間、水を押上げ候處も有之候、前後之橋も損じ、社内は鳥居倒れ候得共、本社并塔坏は、其儘建居申候、新宿は存外無事に有之候、乍併家損等は稀に有之候、

一沼津宿は、潰家數多有之、残り之建家も大破損有之、前後之間之村々も、同様潰れ家多く有之候、且御城内も大破損に有之候由、

一原宿は、殊之外無事に有之、潰れ家も至而無之、同所止宿仕候、承り候得共、伊豆下田表も殊之外大變之由、且又同所々原宿近邊浦々迄、四日晝後荒潮追々來り、家居迄差込候に付、皆々小高き場所へ逃去候所、五日急に引潮に相成、建家并諸道具迄、津浪の如く持去り候由、殊に海岸に有之候並松を、海迄一同持行候や、半道又は壹里程之洋中に、松之梢相見へ候も有之候由、其跡は内海の様に相成候よし、且又異國船沖に相見へ候得共、是は下田表之震動に而乗出し候様に風聞仕候、

一吉原宿は、沼津同様に有之、中程少々燒失仕候、富士河渡船止に有之候間、吉原々川下へ相下り、宮下村と申處々歩行涉り仕、蒲原宿へ出候に付、承り候得ば、岩淵宿は、三島

同様に有之候由、

一蒲原宿は、三島同様に而、大方燒失仕候、乍併間之村々は、殊之外無事に有之候、吉原宿慈徳寺と申處寺に相願、止宿仕候、

一同七日、興津宿は沼津同様、出火は無之、清見寺は別條無之候、下へ入口繩手之間に、津波打上げ候處、五六間有之候、

一江尻宿、三島同様に而、燒失も多分に有之候、

一府中宿は、沼津同様は地震弱く有之候得ども、下之入口を拾九町燒失、残り候建家も大破損に有之、且御城内も殊之外大破損之由、阿部川宿、丸子宿、岡部宿は、殊之外ゆるく、潰れ家も別而少く有之候得共、建家破損は相應有之候、岡部宿へ止宿仕、承り候得共、清水湊は一軒も不殘潰れ、其上出火に而土藏迄不殘燒失、且大船破損仕候よし、

一同八日、藤枝宿入口三拾軒許燒失、残り建家も多分破損仕候、且田中御城大破損之由、三軒屋は建家損じ候許、潰れ家も無之候、島田宿は少々潰れ家も有之候得共、多分破損許に有之候、大井川渡り河原茶屋共、破損仕候、

一金谷宿は、下之入口潰家有之候得共、其餘は損じ許り、無難之家も見受申候、佐夜中山茶屋不殘潰申候、寺は大門、

震災豫防調查會報告第四十六號

乙

本堂潰れ、庫裡は残り申候、

一日坂宿は、殊之外無難に有之候、潰家は殊に稀に有之候、同所止宿、

一掛川は、三島同様に而、宿内は不殘燒失、前後之村々一軒も不殘潰れ申候、且御城も大破損之由、

一袋井宿も、掛川同様燒失、前後之村々も同斷之潰れ、

一見附宿は、建家損候許に有之候、且中泉之御陣屋茂、不殘潰れ申候由、

一濱松は、見附方も尙又無難に有之候得共、寺は拾七ヶ寺、不殘潰れ申候由、且御城は、塀坏少々損じ候許に有之候、同所止宿仕候而承り候得ば、舞坂損じ、荒井御關所潰れ、通路止め相成、御姫海道に相廻り申候、

一十日、御姫海道村々、存外無難に而、(月九)二ヶ日宿と申所へ止宿仕候、

一十一日、本坂越え致し、豊川稻荷へ參詣仕、御油宿へ出、赤坂、藤川、右何れも無難に而、同所止宿仕候、

右之日次は、江戸下谷同朋町大田橋平と申人、山田表へ要用有之由に而、宮宿に於て、同宿仕、借り請寫し候得共、夜分之事故、亂筆御高免可被下候、以上、

宮宿にて

十二月十二日夜四ツ時寫

井村傳大夫

○十月十五日、江戸出立、同月廿六日夕、伊勢路射和邊江着之者々、四日地震、東海道之次第聞書之實說、

但し豆州下田之事も、道中に而聞書、

品川々箱根新屋迄無難、

御關所崩れ、宿内九分通潰れ、本陣三軒とも本潰、

山中、篠原邊、齒ヌケの如く倒れ、

三島、

山際々三町許半潰、夫々上之方不殘潰、燒失、尤明神三本社と三重之塔而已に相成候、死人四五人許、

させ川橋迄、齒ヌケの如く潰、

沼津、

御城内不殘燒、櫓崩れ燒失、壹つ残る、殿は板圍ひ住居、宿より下半分通り燒、問屋々西側皆潰、向側杖ツキ残り、

近在小林村と云所、廿壹軒めり込、屋根許見ゆ、原迄之間、沼津宿寄之方大體潰、原寄之方處々潰、

原宿、

壹歩通り潰れ、

毘沙門迄無難、同所々上之方、小口々潰、

吉原宿、

東之方二町許之處、七步通り潰、燒殘る、上之方不殘燒失、死  
人五六人許有之、

富士川迄不殘潰、川水至而穩、

岩淵不殘潰、小山少々崩、死人廿七八人有之、

蒲原宿、

問屋場微塵に成、同所々東之方、九步通潰、西之方不殘燒失、

由井迄蒲原寄潰、

由井寄之方、別條なし、

由井宿、

格別之事無之、

倉澤無難、

興津宿、

七十軒許潰れ、残り杖突殘る、

ほら村半潰、

三保松原、少々かける、其浪東へ流行き候故、興津、由

井、津波無之、

江尻宿、

東之方二町許殘る、跡不殘燒失、

小吉田迄無難、同所々西皆潰、

府中宿、

御城内大破、石垣堀へ崩落る、宿は七步通潰、東之方三步一  
燒失、

丸子宿、

二步通り潰れ、

うつのや邊、同斷、

岡部宿、

東之方中程迄半潰、上之方不殘燒失、

藤枝迄九步潰、

同宿東之方十町許燒失、御城内大破、上之方半潰、

島田宿、

三分潰、

大井川、別條なし、

金谷宿、

瓦町々仲町迄燒失、上之方四五軒通潰、

飴之餅皆潰、

日坂、

格別之事無之、齒ヌケ潰、

山の鼻之立場迄、所々潰家有之、

同所々上之方、掛川迄皆潰、

掛川宿、

宿内不殘燒失、死人百四五十人許、御城内大破、宿内何壹つ無之、如原相成る、御城は塀所々崩れ、御住居向瓦屋根は所所見る、

拾九町邊、原川、袋井宿迄皆潰、

久能山崩れ、尤 御宮無別條、宮守柳原越中守方、怪

我人有之由、

秋葉參拜所、金の鳥居、燈籠とも、微塵になる、

袋井宿、

不殘燒失、死人凡二百人許、此宿も原の如く見ゆ、小屋壹つ

無之由、

三ヶ野立場まで、同處少々残る、九步通餘潰、

見附宿、

三步通り潰、

横須賀皆潰、死人數多有之、

中泉陣屋潰、

天龍川より濱松迄、三步通潰、

濱松宿、

三步通り潰、

舞坂宿、

津浪は有之候得共、爲差事無之、杖つき家有之、潰家壹軒、

此邊田畑、壹里餘潮入、池之如くなる、

荒井宿、

御關所潰、近邊之町家、無難格別之儀無之、西之方半潰、船引上に參り候もの、津浪にて死人十八人許、

白須賀宿、二ヶ川宿、

三步潰、

吉田宿、

上下總門前後、潰家一步餘之潰、

良顔散迄同斷、

御油宿、赤坂宿、藤川宿、岡崎宿、

矢矧橋迄無難、右橋中程方上之方、三四ヶ所大めり込、尤橋は往來有之、

池鯉鮒宿、鳴海宿、

一步通り潰、

宮宿、

二步通潰、本陣潰、

桑名宿、

無難、

四日市宿、

四十軒許潰、跡格別之儀無之、

海上、若松、別條無之、漁師怪我有之由也、  
間々宿々村々、焼失數多有之、四日市々南寄は、爲差  
事も無之、略之、

○ 豆州下田千軒許之所、三拾七軒残り、流死人凡千餘有之由、

江戸御城之御役人、土地役人共、下々は數多死亡と申、

殿には別條なきと申由也、如何あらむ無覺束由也、今度

江戸々來り候者、戸塚邊に而御道具は來り候得ども、

殿は一向見受不申、如何と申候處、當暮か明春か、御歸

は不分と申事、

魯西亞船も、沖にて數度グルくと廻り、ともの方下に

成て船立候由、中の帆柱之横の貫きを、魯西亞人とり候

處、船平になり候由、大筒穴より轉げ落、夷人數多怪我

致し候よし、

○ 由井、興津宿より、地震之頃海を見るに、逆浪東之方遠見

なれども、横幅凡百間許に見ゆる、伊勢之方は、凡幅壹里

も可有程見ゆる、右兩宿の者嘶しに而承る、

○ 江戸々來る者、彼地にて聞候より、道中筋荒は大なる由、

○ 中食は、芋こんにやく杯之煮たるを食す、上戸は酒飲で凌

ぐ、

○ 泊は破家、宿料は常體なり、只空腹をのみ凌ぐ、

○ 一日歩行之里數、本宿六ヶ敷七八里、或は拾里、又其都合  
にて其餘も歩行す、人馬は不都合なり、此度來りし者は  
達者故、人馬とも不用、

此外横死人數、數多有之候、

○ 正住氏家來柏田直次郎、由井宿方同家へ書狀、十一月七日、同

十一日着、

隨而私儀吉田乘船々八人連に而、都合宜四日に駿河由井宿  
迄參り候處、大地震に而、則由井入口之川原に、三日許野宿  
仕、夫々漸く定宿に罷越し、少々安心仕候得ども、何分道筋  
大騒に而、前後人馬繼立難相成候間、(在脱カ)いまだ當宿に罷申候、  
下略、

十一月七日

柏田直次郎

○ 神津重郎右衛門、遠州々之書狀、十一月七日認め、

小子、先月廿七日國元發足、當月朔日吉田驛へ無滞着仕、參

州御旦廻相勤、當月三日夕、舞坂驛迄罷出、一宿可仕之處、差

急ぎ候に付、其夜御旦中高塚村迄罷越、止宿仕、翌四日御檀

廻相勤可申存仕候處、朝五ツ半時大地震に而、殊に當感仕、漸

々往還江罷出、藪之中へかけ込相凌ぎ申候得ども、中々餘程

震災豫防調查報告第四十六號

乙

之地震、凡半時許も不相止、其節之騒動、難盡筆紙、前代未聞之事に御座候、當夏國元に罷在候節地震よりは、餘程強く覺へ申候、當日も時々地震に而折々鳴動、尤其節地震は戌<sup>北</sup>亥<sup>南</sup>之方よりゆり出し候様覺へ申候得共、其夜未申<sup>西</sup>之方に而度々鳴動致し、時々地震御座候に付、國許邊如何御座候哉と心痛仕候、その夜者中々家に入候而は休み兼、皆々藪之中へ小屋をしつらひ、漸々其處に而四日、五日夕相凌申候、高塚村くづ屋之分は、東西へ少々捻れ申候、當日七ツ時、舞坂驛邊半道東坪井村と申處迄は、高鹽參り、舞坂驛家數四五軒も、沖中へ流れ申候様に承り申候、且荷物三駄之處、二駄は地震後に參り、壹駄之荷物着不仕、甚心配仕候處、御蔭に而無事着仕候間、此段御安意可被下候、三日夜、新居驛か舞坂に而茂止宿仕候はゞ、私共も如何可相成哉難計候處、全く御蔭に而小子共無異、荷物等無滯着仕候段、吳々大慶奉存候、翌五日、時々地震は御座候得共、さして大き成事も無之御座元安<sup>(先カ)</sup><sup>(術カ)</sup>心仕候處、晝七ツ半時、昨日地震方は少々穩に御座候得共、餘程之地震、當惑仕居候處、暮六ツ時前、未申之方に而雷鳴之如くに鳴出し、誠に驚入、右大變鳴響き震動致し候而は、所詮助命難計と心配仕候處、其後餘り大き成地震も無御座、安堵仕候得共、亦々舞坂驛邊は高沙參り、此邊迄も參り候様に

而、人々大きに騒ぎ、皆々少々小高き山杯へ逃候得ども、爲指事も無御座候、右大變に而、一昨四日より新井今切渡海も止り、今以往來通行止め<sup>に</sup>相成候間、種々の評判のみに而篤と分兼候得ども、京都上下飛脚、關東方參り候者、且地震之節、參州吉田に居申候もの、御關所裏を通り參り候者に、荒増聞取、別紙に申上候、當國寶永年中地震後、右様之儀無之、此度大變地震に而、人々大に恐れ、今に家に臥し不申、皆皆藪之中大道へ、小屋をしつらひ、右江休み、少し茂油斷不仕候、併日々穩之方に御座候間、御安心可被下候、下略、十一月七日認め、  
神津重郎右衛門

同人別紙、

- 一濱松驛は、御城内隅櫓御長屋などは崩れ、外別條無御座候よし、町家も處々潰れ候のみ、先穩之方に而、怪我人等も無御座候よしに御座候、
- 一天龍川は、泥水山方方押參り、石なども流れ、出水致し、今に渡船も無御座候よしに承り候、
- 一中泉御代官所、御陣屋は不殘潰れ、町家も餘程潰家御座候よし、
- 一見附驛は、二分通りも潰家、出火にも相成可申之處、早速打消し候よし、死人九人と申事に御座候得ども、疔と分兼



候、

一袋井は、地震に而餘程潰れ、二三ヶ所々出火に相成、二三軒残り候のみに而不殘燒失致し、死人四五十人、怪我人も御座候よし、

一掛川驛は、御城内々出火、半分燒失致し候由、死亡人、怪我人分り不申候、

一參州吉田は、餘程の荒に而、御城も少々損じ候様承り申候得共、遠方之儀、殊に往來旅人も無之、篤と分兼候、二タ川、白須賀は、少々穩に承り候得共分り兼候、往來松原大木なども、處々顛倒致し居候よし、

一新居驛は、地震之上高波參り、大に騒動致し、尤潰家も御座候よし、御關所御番所も崩れ候由、新居々舞坂驛へ壹番越渡海船、二三艘分り不申、薩州様荷物十荷、四枚棒駕籠など、山崎村へ流れ寄り、御家中分り不申候よし、亦沖掛り大船なども、破船致し、且は死亡人も御座候よし御座候得とも、篤と分兼候、

一舞坂驛は、高鹽に而家數四五軒も流れ候よし、當驛は多く板屋根に御座候故か、潰れ門之儀承り不申候、

右掛川驛迄之處は、荒増相分り候得共、夫より先きは往來通行無御座候間、啖と分兼候得共、佐野郡、山名郡、城東

郡、天龍川を東へ越し候而は、又々此邊々は荒れのよし風聞仕、横須賀御城下は燒失致し、榛名郡佐柄田沼様御陣屋も潰れ候よし評判仕候得共、遠方之儀、何分分兼申候、此邊近在村々、大體は捨れ、又は潰れ家茂有之、場所により而は二尺許も地割れ、是々泥吹出し候處も御座候得共、筆紙に盡しがたく候、下略、

○同人、遠州川崎々再度書狀、十二月十六日出、

猶々、地震後は往來止め、日數七八日も相立、濱松々御油へ通ぬけ、本坂越通行いたし候得共、驛々人馬繼立は無之、先月十五日頃、長崎御奉行所、見付御通行に而、驛々一人馬繼立に相成申候、新居今切涉船は、先月廿日頃々通行相成申候、

追々御聞取も御座候通、江戸は先穩に而家潰れ候程之儀は無之、場所により高塀崩れ、屋根瓦など落候事之由、箱根々此方大荒に而、三島驛少々、府中千餘軒、江尻不殘燒失致し候、沼津、府中、藤枝御城大破損に御座候、當地佐柄、川崎なども、凡壹丈七八尺許の津波參り、家數も少々流れ候得とも、是程之儀は都而嘶しには致し不申、當處も皆潰れに御座候得共、私旅宿伊勢舎は小宅に候得共、不思議に相助り、少少破損に而、住居出來申、全御蔭と難有仕合奉存候、

## 震災豫防調査報告第四十六號

乙

下田湊之儀、委く分り兼候得ども、先月大地震、直様津波に而、家數千軒之所、漸々寺壹ヶ寺、町家五六軒相残り候由、御公儀御出張御役人河路某様、地震後、下田へ参り候者承り候得共、御名は失念のよし、津波之節、松の木江御上り、漸々御助りのよし、凡死亡人、旅人三百人、下田之人四百人餘と申事に御座候、其外御出張小田原、沼津、掛川様御役人は、御怪我無御座と申事に御座候得共、具足武器、餘程御流し相成候よし、大船も餘程破損致し、又は津浪に而山際迄押流れ、潮ひくに随ひ、大船大木之根に留、或は山の麓にかゝり、海上江出し候事難成、大に難澁致し居候よし、その節ヲロシヤ船壹艘、下田湊江罷在候處、津波に而少々破損致し候に付、御公儀に相願、豆州戸田湊に而作事致し候趣に而、八百石乗船御貸渡に相成、下田出帆之處、先月廿五日夜南風強く、難風に出合、駿州小次村前沖に而、ヲロシヤ船破船致し、海中江沈み、ヲロシヤ人五百三人乗之處、壹人水死致し候由、異人皆々岡へ上り、大久保加賀守様、水野出羽守様、江川太郎左衛門様御預りに而、駿州一本松村か上陸致し、豆州戸田湊に而、五間に二十間の御小屋、三ヶ所相建、當時戸田湊に罷在候よしに御座候、異國船五丈も海底に沈み、中々容易に引上げ候事難相成候よし、當月十日、掛川御領中島村沖を、異國船壹艘通行之よし、掛川御役所江

届出候に付、御役人當地へ御出に御座候得共、御前崎沖は、夜中に通行候由に而分り不申、亦々去る十二日九ツ半時、御前崎七八里沖、異國船四艘下田をさして通行致し候、當時地震騒ぎに而、異船之嘶しは致し不申候、

當月五日夜七ツ時、地震餘程強く、又々潰れかゝりの家杯は崩れ申、先月大地震後、折々中より壹つ、日々二三度、つゞ震動不相止候得共、爰元兩三日は穩に御座候、御地如何に御座候哉と心配仕候、出羽、奥州邊大地震之よし、尙日光、先月朔日か五日之間大雷に而、死亡人も數多有之、大變之風聞も專御座候得共、虚説歎實説か、相分り不申候、下略、

極月十六日

神津十郎右衛門

○霜月十三日出、憂北生、伊豆下田方之書狀、同月廿九日着、扱當月四日朝五ツ二分五厘許の頃、當下田湊大地震、土藏等は壁落、土地少々割れ申候、泥少々出候位之事に御座候、市中大騒動仕居候處、一刻許も過候間に、大勢又々騒ぎ立候間、出火と存じ、表に出申候處、煙も不見候間、是は定而異人共亂妨仕候事と存じ、我も内も脇差を取に入出候處、早市中に大波参り申候、大工町川岸に大船之帆柱搖動致し、あたまの上倒れ候許に相成候間、漸津浪なる事をしりて、先山際へ上り、旅宿本覺寺へ行んと存候に、市中一面津浪に而、中

中渡りがたく候間、早々了仙寺と申寺の山へ上り見申候處、早一の潮は其節引去り申候に、其波の中を渡りて、市人并諸役人等、皆山に上り申候、

忪然るに又煙草一二ふく許も吞候間に、二の潮來り候やと、人々騒ぎ候得共、一向其様子も無之、大工町の邊りに、煙立上り、出火々々と騒ぎに、寺鐘を撞かけ候に、又阿治川邊に出火燃立候間に、

二の潮柿崎濱へ突かけ、浪除土手を越て、下田湊へ參り候に、其浪にて二ヶ所の出火消、九百軒の人家、一時に將某倒しに相成、青海原と相成候、八百石以上の船十三艘程、下田町を打越、岡方村、本郷村の、畑中、又村中へ上り、其時異國船は、若の浦と申處に繋ぎ有之候處、早纜切れて、大走島の上の方、鷗島の下の方に漂ひ來りしに、早三段にかけし橋、壹段と致し、大ゆれに成て流れ來りしが、其二の潮の引につけて、元の邊へ戻りたり、

扱又しばし有て三の汐、柿崎へつきかけ候に、此汐にて百餘軒の柿崎村、一時に碎かれ皆流れ、又其邊りに繋ぎし大船、凡拾七八艘、此船皆五百石が七百八百石迄也、村中に打上げ、碎かれ流れたり、其潮下田の方へ廻り來りたれども、最早一軒の家もなく、青海原の事なれば、其潮、本郷村、岡方村の邊一面にさし込て、

山際まで打かけたり、

扱其時異國船は、七分傾に成て、又鷗島の方に成るや、最早大半破れ候哉に相成候間、親を失ひ子を失ふ人民も、一時にシタア〜と喜び、山の上畑の端に行て、大聲上て悦びたり、其時、此大變にて失ひし面色は改め、こぶしを振りて、ツキタヲセ〜と勇み立申候、其聲しばしはやまざりけり、

扱其二の潮、三の潮にて、子を抱て逃る女や、親を負て山に登るもの、皆水底に沈み、或は樹の梢にかぶり、又流れ行屋根棟に乗て叫ぶ聲、實に目も當られざるさま也、然るに其中にも、異國船の傾きて今にも打碎かれんとする時は、其者どもシタアノ〜と喜びけり、

四の潮、五の潮、六の潮も、最早追々干潟にも成る時節につき、追々軽く相成候、又ながし候家もなき故に、大に静り候に付、其より山の上に逃上りし者も、皆九ツ時頃の下に下る也、

川路様、松本様等、皆本覺寺山の上に陣取、馬印幕を押立て而其中にこもり給ひ、彼處此處にて流れし伊丹樽の鏡をぬきて飲、また井戸は皆埋れ、川の水は一滴も無様に成候、其邊り皆泥海と相成候間、飲水と言もの少くもなく、私共等の

もの、渴し候には酒を飲み、畑に出で大根を引て喰、飲食少しもなく、實に地獄餓鬼修羅の有様、一時に來り候許之次第に御座候、

又其中に諸役人様の旅宿へ、騒ぎを見かけて盜人に入候輩も有之候、實に我等が筆狀致さるべき事に御座なく候、

纔一時半許の間、千軒の下田、百五十軒の岡方村、漸く残る所は、坂下町と申に拾八軒有之候事に御座候、其餘山の際に立候寺は、半潰れ位に相成候、其寺に御止宿に御座候、

伊澤美作守様御宿寺口田寺、半流に相成候、床の上泥水つき申候、

古賀様旅宿、不殘流れ候、荷物皆流れ、鎗も失れ申候、

都筑様御旅宿寺、皆流れ、荷物すこしもなし、

村垣様御旅宿長樂寺、無難、少々のいたみ、

應接所福泉寺、流れ申候、

筒井様御旅宿海禪寺、皆流れ、

川路様御宿泰平寺、皆流、

松平様御宿本覺寺、皆流れ、

其外魯西亞人休息所、皆流れ、

小普請所、半流れ、

黒川様新宅御役所、皆流れ、

同心屋敷拾壹軒新宅、皆流れ、

魯西亞人小休息所了仙寺、半流れ、

其外御勘定宿、御徒目付、御普請役宿、皆町宿に御座候間、着の身着の儘にて、逃出され候許の事に御座候、

尙青山様用人、筒井様陸尺、日下部様家來、其外諸役人衆家來、多く死去有之候、

又日本人三人、内男二人、女一人、異國船に助られ候も有之候、又英國船バツテイラ壹艘、柿崎濱に打上げ、七八人乗居候も、餘程

痛み有之、其外二艘程碎け申候、右五六人の夷人は、翌五日晝頃迄、柿崎村の畑に大根を喰て居申候、五日、漸々送り届

に相成候、又揖は折れて、柿ざき濱と申處に打上、當時五六人許づゝ、日々上陸仕候、作事致し罷在申候、

又英船に水入候由に而、日々水車二挺づゝにてかへ居候、右水車少し油斷致し候へば、直に二尺許づゝ深く相成候、船中

必死に相成かへ居申候由に御座候、我々は泥中より俵を引上げ、玄米を鍋の割にて煮て喰ひ居申候、井戸埋れ、是をか

へ候はゞ潮入候て、少しも飲め不申候、渴し候時は、酒を飲許の事に御座候、其夜三度程地震仕候、左候得共さしたる事なし、

五日、又九ツ頃大津波來り候由、誰いふとなく風聞致し候、

我々本覺寺山々本郷村江引移止宿仕候處、夕六ツ半頃、又津波來り申候、下田岡方村江上り候得共、最早流し候人家無故に、さして騒ぎ不申候、二の潮も凡十町許の方まで上り申候、

六日、諸役人様方總寄合に而、村垣與三郎様、夕七ツ頃方梨本村迄出立に相成候、江戸江御越相成り、今日ホーチャチン、ポスセツト、リソシケ等上陸仕候、中村爲彌、横田新之丞、永持亭次郎應接有之候、乗船大破に相成候、引取兼候に付、乗船作事之儀願出候、

七日、ホーチャチン、ポスセツト、リソシケ等、長樂寺へ上陸、中村、横田、永持應接有之候、今朝方魯西亞人共、鼻黒辨天に大砲不殘上げ申候、追々普請相懸申候、

右に付、下田湊にては出來兼候間、兵庫、遠州濱松兩所之内拜借仕度由、願出申候由御座候、

十一日、今日應接有之候處、船中最早飲食無之、三日之貯、漸漸之事之由に御座候、ホーチャチンも蒸餅<sup>パン</sup>を喰て茶を飲候許之由に御座候、實に轍底之至之由申出し候由に御座候、忝然るに彼等江誰か内通致し候者有之候哉、近頃又志州鳥羽湊を拜借仕度由、又々申出候由、實に獅子身中の虫の多き世の中に御座候、

同十一日、異人四人、御小人目附山田八郎、普請役萩野才助、下田同心服部建藏等同道に而、網代方熱海邊を巡見に行き申候、此網代湊宜敷候はゞ、此處にて作事に相成候由に御座候、下略、

十三日

憂北生

下田湊潰流れ之分、

八百拾六軒、

同半潰、

廿五軒、

同水かぶり、

拾八軒、

同園方村、

百十二軒、

柿崎村、

百十一軒、

本郷村、

六十七軒、

中村、

十二軒、

其外死人、諸家様人數、小普請方日雇のもの、船頭、船方、凡五六十人、

大船、

凡三拾五六艘、

に御座候、其餘松崎村不殘流れ申候、何歎書しるし度事澤山御座候得共、丸牒、紙さへも無御座候次第御座候間、何分例之亂筆、御推察奉願上候、謹言、

○大湊山中氏方來る書付、

大湊遠州作兵衛船

五百石積 沖船頭三右衛門

右船、江戸に罷在、先月十一日、豆州下田江致入船候處、大坂に居候魯西亞船壹艘、下田近邊柿崎と申處に居申候、船長さ四十間許、船中拾間許、黒塗に致し、水入之處は鐵張にいたし候船に御座候、右船、津波之前、下田之沖之びしやごと申島之外に罷申候處、津浪に根之びしやごと申邊へ流れ、引浪に而沖之びしやごと島へともを打揚、此處に而楫を折り、敷を少々損、船へ水入候由、又々浪に而びしやごと島を出、只今は柿崎江掛り候由、右船乗組四百八十人、其内津波之節、六人死亡致し候由風聞御座候得共、是は慥に知れ不申候由、大筒六十五挺所持いたし候處、船損じ候後、三十五挺陸へ上有之由、

一下田人家千軒と承り傳候處、山際之所拾六軒相残り、其外不殘流失致し候よし、御役所も流失致し候由、御役人方御無難之由、只今下田々壹里許隔候善臺寺と申、温泉之御座候處に御暇住居被成、下田へ御通ひ之由、下田流死六百人と承り候由、

右之通、三右衛門申之候、

寅十二月九日

右之通、船頭より取聞、御役所へ書上申候、

○在江戸憂北生々書翰、十二月七日付、

霜月廿三日、下田湊出立仕候、伊豆東海岸通り、小田原へ出、廿八日江戸へ歸宅仕候、

扱此度之地震は、日本半分と被存候、大坂并紀州、四國、山陽道筋等、實に以洪大の事に御座候、定而東海道筋の事、并甲斐、信濃松本邊之事等、御聞及びにも相成候哉、最早御聞取に相成候と存候間、御しらせ不申上候、

江戸は存外軽く御座候、霜月四日五ツ半過、

大手之石垣、 參拾間許潰、

南部様玄關潰れ、 凡五六千兩のいたみ、

阿部様辰の口様、 凡千兩許のいたみ、

會津様、 凡五千兩程いたみ、

松平紀伊守様、 凡千五六百兩の痛み、

高松様、 凡千兩許のいたみ、

等申候事、市中至而穩に有之候、只久保町々丸の内、大手、小川町、小石川邊が荒に御座候、水戸様は凡一萬兩のいたみと申候位の事に御座候、

其日、又江戸表はさして津波の印も無御座候得共、山谷堀に而は、凡三四尺も常水々高く有之候、屋根船茶船を少々

いたため申候位の事に御座候由、  
五日夜四ツ前か、

聖天町々出火、横町、花川戸、山の宿、馬道、猿若町三町、皆  
焼、川東へ飛火仕候、水戸様御下屋敷江うつり、米藏少々  
并に炭貳萬俵許を焼申候、扱又下田表滞留の異人共、是非  
下田にて作事出来兼候由に而、外湊借用仕度由願出候、十  
二日網代湊を見分に参り候處、此處に十四日迄滞留致し  
歸り、夫より又々十七日、駿州清水湊へ行候處、此處も狹

く候間、伊豆の西海岸戸田と申候で、沼津々五里許東の方  
の湊を願候、廿五日に下田表々同湊綿屋吉兵衛と申船に  
て引かれ、下田出帆仕候、廿七日に相成、右異船、原と吉原  
の濱手へ流れ候、其處にて右を引候船は碎け申候、異船は  
水船に相成沈み、魯人も皆バツテイラに漸々の事に而乘  
移り上陸、其内助け船等参り申候、右之者を助け参り候次  
第に御座候、漸々の事に而命を助り候由、實に此度之珍  
事、實に以目出度事に御座候、是に而如何許歟、本邦之人  
の氣習を引立るかも知れ不申候、神風は吹ぬものと存居  
候處、此度之事、實に〜珍事に御座候、

一扱神地は至而地震薄きよし、當方にて申候、定而左も有べ  
き事と奉存候、下田在本郷村の賣布明神は、田の中に有之

候、社地へ水一滴も参り不申、夫より上拾壹町に、千二百  
石の船打上げ居申候、實に不思議の事に御座候、

此宮、式内之由也、

扱米は、百文に八合五勺々九合五勺位に御座候、是にて先  
人氣は穩に相見へ候、

一出羽、奥州は、地震無之候、

一關八州、至而穩に御座候、

十二月七日

憂北生

○同人々、十二月十五日之書狀、

扱先達而申上候魯西亞船、又々駿州沖に而三度目をやり申  
候由、最早其船沈み、檣の先少々許見へ候許の事に相成候  
由、併人死はさして無之候得ども、船は少々も間に逢不申  
候、其魯西亞人、廿八日に覆り候後、二日にはバツテイラ  
に而諸方に上陸致し、百姓家等にて養生候由、併其百姓家  
も地震に而潰れ多く候間、必死の目にあひ居候と申事に  
御座候、

一字和島は、實に此度之地震、日本第一の由、下略、

極月十五日

憂北生

〔同書〕<sup>五</sup>

○安濃津某氏々林氏江送る書狀、十一月七日出、

## 震災豫防調査報告第四十六號

乙

寔に當四日辰之刻比大地震、驚入申候事に御座候、引續濱手  
 を津波來ると申唱、市中之混雜、上を下へと騒動仕候處、不輕  
 高潮一旦引口に相成候處、二度目四ツ半頃に又々大波來り、  
 入江町之堀川口上へ水上り、堀留新地裏迄潮上り、市中之騒  
 動、未曾有之大變、愛宕山、千歳山邊之退去申候事に御座候、  
 小生は最早致方無御座候事故、覺悟相極候而、近所廣場へ假  
 宅相構、夫に罷在候、扱地震も五日朝卯刻前大震有之、夫が  
 微震、一時に二三度、暮六ツ頃大に震、續而中震、戌刻頃又大  
 分震、亥刻頃又餘程震、昨六日も卯刻頃大分震、夜亥刻頃餘  
 程震申候、右に而御家中向大破、寺院向大破、併本堂潰れは  
 無御座候、市中も岩田立合町、辨財町邊を藤枝町邊迄は、五  
 十軒許倒れ申候、橋内は裏町邊に壹町に三四軒も倒れ候得  
 共、通り町筋には、倒れ家は格別無御座候、土藏向、庇向、高堀  
 杯は、大破損相成申候、住居も餘程之損じに相成申候、極樂  
 橋は落申候、御學校講堂も倒れ申候由承り申候、いまだ眩  
 と損所申出無御座候間、委細相分候は、早速可申上候、何  
 分大變之次第、恐怖千萬、六月之地震とは、四五割直打物、此  
 後は何分靜謐奉祈上候、小生假宅に出住居仕候而、いまだ宿  
 元破損場も眩と見届兼居申候、御推察可被下候、  
 此度は伊州上野は、方度輕く候や、四日市も六月之節とは餘

程輕く候や、尾州は常滑は半潰れに、津波に出合候よし届來  
 候間、左すれば智多郡は大變と奉存候、熊野も昨今魚荷物杯  
 を承り入候處、古和いせ島、神前、長島熊野、夫が引本邊は、津波大變、  
 古和なども三百軒餘も、漸八軒残り申候由、神前も同様位  
 之處、七軒残り申候、宿浦杯は皆潰れ、五ヶ店も大變之事と  
 承り申候、

十一月七日、書認、

京は大坂共、六月とはちと強く候様子に相聞申候、水口、  
 關、坂下邊は、六月は輕く申居候、

○同所十四日之書翰、

追々地震もゆるみ申候、今日は又々晝四ツ半頃、少々こたへ  
 申候震御座候、夫が荒吹に相成、夕方小降雪出し申候、是  
 に而汐變り氣候定り可申と奉存候、當地も此度は餘程之破  
 損出來、殊に御家中向、寺院方は、格別荒強御座候、町方は格  
 別之儀も無御座候、五六十軒倒れ家出來、半潰は一向多分菱  
 成之家多く御座候、郷方は御領下潰家、半潰家六百軒許、内  
 百十軒許本潰、跡は半潰、乍去日中故、人怪我は一向無御座  
 候、町方に而高潮騒動之節、岩田橋へ打付候而壹艘人船損じ  
 故、四人流れ死仕候、郷方は男四人、女壹人、怪我に而相流申  
 候、委敷取調べは未だ相聞不申候間、其内可申上候、贊崎



土手邊は、二三尺も高低出来候而、一尺許も口開きわれ、一面に地われに御座候、御丸之内横濱内記様前地面下り、ひびわれ泥吹出し申候、追々委敷可申上候、

十一月十四日認、

○射和竹川氏々廣田氏江來翰之内、津は軽く承り候處、書上左に、

- 一 潰家、 五十軒、
- 一 半潰家、 百十五軒、
- 一 大破損傾家、 廿二軒、
- 一 破損并傾家、 二百八十四軒、
- 一 潰土藏、 十二ヶ所、
- 一 半潰土藏、 三十二ヶ所、
- 一 大破土藏、 百九十二ヶ所、
- 一 半潰潰堂、 六ヶ寺、
- 一 大破傾庫裡、 廿七ヶ所、
- 一 流死、 貳人、
- 一 潮入家、 十三軒、
- 一 近邊郷方、
- 一 潰、 百七軒、
- 一 半潰、 四百九十二軒、

安政元年

一怪我人、 五人、  
右之通に候、松坂はいまだ調べ上げ出来不申、近々調べ出来候はゞ可參答に候、南島(はカ)に流失震潰等も夥敷様子に候、

○津波損所之覺、津某氏々來、十二月十日來、

町方、

- 一 潰家、 五十軒、
- 一 半潰家、 百拾五軒、
- 一 大傾家、 廿二軒、
- 一 破損家、 二百八十四軒、
- 一 潰土藏、 十二ヶ所、
- 一 半潰土藏、 三十二ヶ所、
- 一 大破土藏、 百九十二ヶ所、
- 町方寺院、
- 一 潰堂、 二ヶ所、
- 一 半潰堂、 二ヶ所、
- 一 大破堂、 七ヶ所、
- 一 潰書院、 八ヶ所、
- 一 半潰及大破書院、 十二ヶ所、
- 一 潰門、 五ヶ所、

四四七

一 半潰玄關小屋、井戸屋形 ども 六十六ヶ所、

一 大破小屋庇并廊下共、 百五十六ヶ所、

一 潰高塀雪隠等、 五十四ヶ所、

×

町方、

一 潮入家、 十三軒、

一 流死人、 四人、

×

郷中、

一 合畝數百八十三町四反拾七步、本田、新田畑共、

潮入、泥吹出、山落、埋ゆり込、缺所、

一 鹽濱畝數七町餘、砂入、

一 堤切所合長四百八十壹間、

一 同缺所合壹萬九千七百五十二間、

但し田畑、往還、池所堤、川堤、道缺、山缺、溝手缺所、ゆり割、摺り下り共、

一 潰家、 百七軒、

一 半潰家、 四百九十二軒、

一 潰書院、 五ヶ所、

一 潰土藏、 四拾九ヶ所、

一 半潰土藏、 二百四十四ヶ所、

一 潰小屋、 百廿四ヶ所、

一 半潰小屋、 百廿六ヶ所、

一 半潰堂、 四ヶ所、

一 潰小堂、 二ヶ所、

一 半潰庫裡、 壹ヶ所、

一 潰社、 六ヶ所、

一 半潰社、 四ヶ所、

一 潰門、 九ヶ所、

一 半潰門、 三ヶ所、

一 潰高塀、 四十四ヶ所、

一 傾家、 二百六十軒、

一 潮入家、 四十三軒、

一 橋落、 廿五ヶ所、

一 内石橋十三ヶ所、板橋九ヶ所、土橋三ヶ所、

一 水筒損、 六十五ヶ所、

一 山落、 五十七ヶ所、

一 井堰落、 二ヶ所、

一 簗損、 四十九ヶ所、

一 漁舟流失、 二艘、

一 小屋流失、

二ヶ所、

一 割木流失、

壹萬二千把、

一 汐留損、

百三十三ヶ所、

一 怪我人、

五人、

一 牛馬、怪我無御座候、

右、十一月四日朝方同五日夕迄之書上げに御座候事、

○久居在柴山藤右衛門書狀、十一月十七日着、

去る四日朝、不存寄大地震、御地に而も同時一同之事之由、弊地山村に近く候故哉、當六月同様之事に而、少々之損迄に御座候、津は震も嚴敷迄、地震後四ツ時前津波と申觸に而、町方一面に騒立、近在半田山、千歳山等へ家宅を捨遜出し候事に而、誠に大怪奇事に御座候、然るに大高汐に而、海邊人家も汐入、岩田橋邊茶屋三四軒潰れ、川岸に而死人四五人御座候由、城内も大分之破損、久居も家中向大破、近在潰家多御座候、松坂は地震最強く、潰破損、津々も多く候由風聞仕候、突波之事は始て見及び候處、直にさし引の尖速なる事、恐じきもの候由、碇綱數條をおろし泊り居候船共、速に打切、川口方押込候て、岩田橋損候事に御座候、津々北之海邊は、大穩に御座候由、四日市、桑名も、格別之事は無之、少々は潰家も御座候由、一年に再度迄之大地震、其以來、諸方共小屋住

居候而日夜を送り申候、下略、

柴山藤右衛門

○東海道飛脚之噂、

宮、鳴海、池鯉鮒、少々之損家、岡崎、橋二ヶ所ひづみ、藤川、赤坂、御油無難、荒井、御番所潰れ、袋井、掛川、宿内不殘燒失、金谷山崩、三分通り埋、天龍川南に切込、

夫方在は相分り不申と物語候由、四日市方申越候、

○伊賀某氏方來書、十一月十四日付、

去る四日地震、御地殊に強く有之候様子に承知仕候、當境は六月度よりは稍軽く候而、家族共無恙罷在候條、乍憚御省慮可被成下候、浪花表地震は左程に無之、船は八百艘、安治川、木津川、堀江川、新川筋江、津浪のため壓揚り、入水之人數五千四百許も有之候趣、寔騒敷事共御座候、右騒動中、又々異船渡來之風説御座候處、是は薩州公より公儀江御届相濟候上、新造之橋三本立之船に而、兵庫洋江は七日朝渡來仕候由承之申候、下略、

十一月十四日

○神戸磯邊宇右衛門方書狀、十一月八日出、

今般は神戸表、前後に比較致し候得者、稍緩き方に而御座候

震災豫防調查會報告第四十六號

乙

得共、何分此度は兩度之大震長く候而、人々顔色如土、恐惶仕候、四日市邊、右同様怪我人等無御座候趣、併潰家四五十軒許も出來候よし傳聞仕候、桑名邊大に緩く、此度は津方松坂、總而南寄、餘程嚴敷承り申候、別して津浪來り候由に而、此近郷海邊之處は、誠に騷敷候儀御座候、昨日關宿飛脚宿川北氏か申越し候には、名古屋、岡崎、佐家、一ツ家邊、餘ほど嚴しく、大坂天滿天神御靈宮井戸屋形崩、阿波座邊廿四五軒崩、堂島も所々潰家御座候、座摩宮石鳥居崩、清水舞臺崩、死人多分御座候由、其外宮々荒井宿迄宿々半潰に而、御休泊も出來不申候由申來候云々、右乍序申上候、此様子に而は、諸方共甚敷事と奉存候、寔に可恐之年柄に御座候、併 御兩宮、總而御無難に被爲在候趣傳承り仕、難有御儀奉存候、御神徳之段、深く奉感伏候、以上、

十一月八日

磯邊宇右衛門

○四日市森本一兵衛書狀、十一月十一日出、

當月四日より度々之大地震に而、一同恐怖仕候、皆假宅に罷在候、併六月之地震よりは少々寛く御座候、尊地邊は餘程強く荒候様承り候得共、實説は不相分候、海近は高潮満込、家居も潰れ候様、區々噂仕候、當地も地震後、不時に汐満込、騷動仕候得共、直に引、怪我等は無之候、六月中々度々之震故、

皆家ゆるみ候得ば、存外倒家も有之申候、新に建候家は損じ無之候、私宅などは古物故、此度は大に斜に相成候、藏は壁落瓦落、大破損に相成、假宅に消陰仕候、下略、

十一月十一日

森本一兵衛

○四日市伊達太右衛門書狀、十二月廿日出、  
同月廿三日着、

當六月十五日曉比、前代未聞之大地震に而、誠に以驚入申候、其上拙地は、往還道出火に相成、實に以當惑仕候事に御座候、乍去小生方は、居宅も無難に而大幸仕候、中略猶霜月四日、五日之地震には、南勢邊も大分震候由風聞仕候に付、如何と御案事奉申上候、當地邊は、六月中之地震か餘程軽く覺申候、乍去少々潰家等出來申候、則六月、霜月兩度、四日市町中潰家、別紙に相認備覽申候、下略、

十二月廿日

伊達太右衛門

六月十五日、大地震之節、

- 一潰家、  
三百四十壹軒、但し土藏小屋は數に入ら、
- 一潰燒失家、  
六十二軒、
- 一半潰家、  
三百拾九軒、
- 一半潰同様、  
七百八拾軒、
- 一死人、  
八十九人、

一 燒死人、

六拾八人、

一 潰寺、

拾壹ヶ寺、

十一月四日地震之節、

一 潰家、

拾壹軒、

一 半潰家、

百四十五軒、

死人、怪我人は無御座候、

右、兩度之地震に、支配御役所御届之控に御座候、

○北勢四日市在佐具良村佐野佐吉郎(太カ)書翰、十一月二十  
四日出、

此度之地震、當地之儀は六月よりはゆり軽く、潰家、怪我人等は一切無御座、古き建物之分少しゆり傾き、其外谷々田地缺けゆり割れ之向、當村地内に而彼是十五六ヶ所、地低之田方割れ目々赤泥吹出し候場所三四ヶ所、山落橋落、堤道ゆりわれ等は數ヶ所御座候、此度は建物損じは、格別之儀に無御座候處、田地缺落等は、六月之荒に續き候破損に而御座候、今に以日々小地震に而村内不穩、一統うろくと相暮罷在候、一旦はいづれも假小屋しつらひ打臥候處、頃日に而は少少人心取静り、八九分は居宅に而起臥仕候様に相成申候、  
下略、

十一月廿四日

佐野佐太郎

○今井田氏、尾州名護屋を歸宅に付話、十二月十二日歸國、

四日之地震、名古屋も同刻也、餘程震ひ、裏町は倒家も有之候得共、表町はさしたる事なし、御家中向、餘程潰家大破等も有之よし、五日夕七ツ半頃、又大地震也、五日夕方山鳴あり、名古屋は津波之憂なし、しかし堀川筋杯、小船大分損じ申候、

一 宮も表町は仔細なく候得ども、貳町杯は餘程之損じ、津波は傳馬町迄參り候よし、がうごも同様なり、

一 笠寺近邊、地震に而餘程之潰のよし、

一 宮邊、津波は五日に成り候よし、

一 名古屋は、三日夜雪にて三四寸積る、翌四日晴天也、

一 智多郡へ參り候道などは、田畑一貳尺も突上げ候處有之候よし、

○尾州智多郡之人樋口慶輔、志州小濱方之書狀、十二月

去月四、五兩日之天變、諸方共倒屋、且水火之難茂御座候由、寔に驚入候、貴地御儀、餘程之破損之由に候得ども、白晝之儀、殊に水難も無之土地柄に候得ば、死亡人無之よしに後に承り、是にて些安堵仕候、右大變之折柄、四日市に致滞船在、眼前倒家を見候事、寔に膽消之至に御座候、小生在所など

震災豫防調查會報告第四十六號

乙

は誠に平穩にて、損所壹ツも無之位之事に御座候、乍恐御安慮思召可被下候、下略、

十二月二日

樋口慶輔

○尾州智多郡内海日比彌兵衛書狀、十二月三日出、

扱去月四日大地震、御同前と奉驚入候、内海邊は存外大荒に而御座候、四日五ツ半時大地震、其後小震度々、當所も別而家込故、衆人あちこちと奔走致し居申候處、津波と申し出し、大騒動仕候得ども爲指事なく、四五尺高満ち致し候而已に御座候、地震は四日夕方迄に三度大震、五日夕七ツ半時、又々大地震、皆膽を冷し申候、當所潰家棟數廿軒許、半潰四拾軒許、餘は少しづ痛み候而已、私共居宅は少々傾き候得共、先其儘に而住居出來申候、今以假屋住居之者も御座候得共、私共儀は、十四日より家内に住居仕候間、此段御放念奉願上候、

十二月三日

内海

日比彌兵衛

○參州永良諏訪若狹守殿陣屋役人朝岡司馬造々、千賀氏江來書之端書、

當四日地震、御地無御別條候哉、當陣屋邊は爲差儀も無之、

難有事に存候、幡豆郡之内にも、海邊松平備後守様御領分吉田村、高島村、大島村、相木島村、殊之外大震に而、家作、土藏等夥敷潰候上、高津浪打上、家居汐入に相成候、汐受候堤等、數ヶ所切込候上、潮時常よりも日々高く成、時不順に而堤築立六ヶ敷、急速に出來兼、右村之内にも、日々居宅様之上迄潮満込候者も有之、難澁之由に候、尙又渥美郡外濱通り、津浪に被引候村も有之、其外村々堤等、壹丈三四尺位震ひ沈み候場所、數ヶ所有之、三州に而は前代未聞と申事に而、乍序御見舞申上度候、以上、

○村島競、濃州綾野村々書狀、十一月十日認、

當月三日夜明々雪降り、四日五ツ頃迄には、北方村に而二尺餘御座候、四ツ時分とも思ふ頃地震、夫々度々震ふ、五日夕方方に震ひ、夫より段々輕み申候得共、雪中故、大に困り入候、火を焚く事を恐るゝ故、あろり之中江水瓶を居へ置、夜分は村之長持帳箆等を兩方へ置、用心致し居候、併北方は潰れ家壹軒、綾野村は八九軒潰れ申候、大垣は大分潰れ家御座候、捨れ家數多御座候、文吉は伊目良大桑江參り居候故、格別之儀も無御座候、私も北方村に居り候故、仕合に御座候、伊目良、北方邊は戸障子はづれ候事も無御座候、綾野、鹽田邊は戸障子迄はづれ申候、一兩日は大に輕み候故、少し安

心仕候、今朝文吉儀は大坂に向發足仕候、私儀は明十一日、江州へ罷出可申候、下略、

十一月十日

村島 競

○濃州高須吉田某方廣辻氏江來書、十二月十日出、

扱先月は如貴諭不輕大震に而奉驚入候、弊宅も此度は殊之外及大破、最早住居もむづかし様相成候に付、此節取壞、専ら普請に取かゝり居申候、土藏も壹ッ潰れ同様に相成、其餘損傷不少、困り入申候、貴境之御模様承り候處、邊(此脱カ)ささして甲乙も無之様奉存候、弊宅は少々かろきかたに御座候得共、四隣(并カ)を近郷、倒れ家多分之事に御座候、扱諸國變狀追々相聞候處、東海道は本々、西國迄も不輕噂而已にて、實に御さたの通、寶永度此方之事と相見へ申候、就中、難波は水死五千人に餘り候由、扱々寒膽之次第、畏縮此事に御座候、宮宿は五十餘軒倒れ家有之候位之事に御座候得共、熱田は御境内之燈籠、一ツもたふれ(ほ)ざる由、兩宮御無難之事は、素々さも有べき儀とは存候得共、穴賢穴賢、實に難有御事に御座候、御同前口所に而は無御座、地震嘯に日を送り申候、何卒來陽にも相成候はゞと、社中とも申合居候事に御座候、尙只今に餘動有之等、安堵之場合にも至り不申候に付、隨分御用心專一に奉存候、下略、

十二月十日

吉田 耕平  
吉田房七郎

○高崎堅造、信州松本方宅許之書翰、十一月六日認む、(宿内カ)

道中筋、福島迄罷越候處、五ツ半時頃大地震有之、内宿之嘯し承り候處、近年不覺之由、夫々奈良井宿に而承り候處、松本城下大變之由、一統相驚、指急ぎ松本着致し候處、城下方家潰れ、中町通魚之棚、兩側とも不殘燒失、餘程之大火、凡三百五六十軒も燒失相成申候、尤朝五ツ半時頃之事故、多分之人損無之、火元に而五人死し候由、白治方離座敷七八分潰れ、重も家は七八寸も柱傾き申候、其上度々之震に付、夜中道中支度之儘、わらむじ迄用意致し、夜通し六度走り出候始末、近邊之儀は、實事相分不申候得共、風聞には諏訪御城内か出火致し候由、上田城下も出火致し候由、五ツ過か八ツ時頃迄燒失致し候趣、四日市、同様之嘯し口に而、實事今以相分不申候、善光寺、松代邊も大變と申而已承り申候、乍去銘銘儀は一同無事、荷物等は無滯受取、例年之通に而繼立參り候間、御安事被下間敷候、下略、

十一月六日

堅 造

○幸福氏家來、甲府伊勢舍方書狀、十一月十日出、

## 震災豫防調査報告第四十六號

乙

一吉田乗船之儀、甚都合宜敷、其日正八ツ時着岸に而、一同大慶に御座候、不取敢書狀頼置申候、相届候哉、夫々道中も都合宜敷、興津宿々致通行、去る三日下山、酒總泊り、翌四日朝、八日市場宿迄参り、此宿より切石宿江御存知之通半里許り御座候、往還通は、山路河原を行けば近道に御座候、然に同河原へ朝五ツ半頃かゝり候處、地震發り、中々以立居不相成候程之事に而、互に顔を見合、暫居申候處、相鎮り安堵仕候、山路々は木石崩れ落來り、誠に恐敷事に覺居申候、乍併運強、廣き河原に居申、一同并荷物共、無難に罷過申候、夫より回り道を参り、切石宿へ着仕候處、中大騒動に而、荷物繼立杯は難出來、問屋重左衛門殿と申家に而世話に預り、其夜は同宿善妙寺と申法花寺へ一宿仕候、右に付往來は止り、翌五日、荷物を川船に相頼、大津揚りに致し置、鵜澤に参り候處、取分け大震に而、八分通り倒れ、目も當られ不申次第に御座候、青柳邊は又格別之事も無御座、併中郡通りは道惡敷由にて、大捫之先より和泉通りへ参り候處、又々この邊は震倒れ甚敷、加々美法善寺之前へ、二間四方許り青泥を吹出し有之候、併大寺は土藏小門位之事に而相濟居申候様見請申候、鏡、中條邊も七十許り倒れ申候様子に御座候、夫々甲府迄は格別之

事も無御座候處、柳町二丁目、八日町、魚町通りは大震に而、土藏之分は無難無之候由、取分け升太杯は、土藏九ヶ所も半潰れ同様之由御座候、近習町通より上は無難に御座候而大に安堵仕候、當屋敷も棟瓦杯震落し候位之事に御座候、

一當隣國邊、風聽も眩と難相分候得共、信州、豆州、駿州邊も夫々震申候由に而、其内も下田并駿府杯は大荒之趣承り申候、扱當所も跡形付未鎮り不申、心配罷在候、

一當國も震ひ倒之場所は、鵜澤、甲府、其外は未だ眩と承り不申候而、切石を川船積荷物も、川筋惡敷相成候哉、今に大津へ着不申候に付、甚心配に罷在、明日は早天に右切石へ調べに遣し可申積りに相談致し居申候、

一郡内邊之趣も未承り不申、如何に御座候哉、江戸表杯は、格別之事も無之候様承り申候、右之段荒増申上度、餘は難盡筆頭御座候、下略、

中森 重兵衛

伊藤市左衛門

渡邊 良造

横橋小左衛門

松村左一郎

十一月九日 夜認、



松村直次様

○越前敦賀吉田宗左衛門書狀、十一月十七日出、十二月十一日着、

去る四日朝四ツ時、深雪中之大地震、進退六ヶ敷、一同困り申候、暫時に潰家も有之、即死人も有之、恐惶之仕合に御座候、乍併弊族共、一同無難に逃候間、御安慮可被下候、貴境は格別之事は無御座など風聞御座候得共、何分三日夜一時に積雪二尺に及、山手は五尺六尺に及、其後兎角不天氣に而、山手は一丈にも及候所も御座候趣、右故歎四方之消息、一向分り兼申候、京、大津邊は弊境より軽く、大坂は京より強き由、其上五日夜海嘯に四日、五日之地震を川中に而避候者、海口に滯泊之大小船、一時遡候而被壓死亡多之風聞に御座候、然るに兩三日前より志州鳥羽、海嘯之爲に半は滅却杯申候、右に續き東海道宿々、大荒れと申候得共、京坂と違ひ、確説わかりがたく、山田、津などは、地震も爲指儀は無之、海嘯之厄は固より無之と申ものも有之、地震、津藩はつよき様子と申ものも有之、何分弊境之地震は、深雪中故破壊も多く、即死は一人之外不承、邑中に而も山の麓は軽く御座候、弊屋方角は強き方にて、土藏壁半より下落候事に御座候、五日夕之地震より一同恐怖強く、假小屋を打候而、十日、十一日頃迄、右假小屋に止

宿致し候、尙莫後も假小屋住居之者有之、戸々地震に驚き、屋上之雪一時に拂ひ落し候得共、(者カ)街路進退彌六ヶ敷候故、空地或は川中へ雪を切捨、其中に戸々假小屋を造、其光景、戦場も同様に御座候、乍然次第に動揺も薄きかたに而、追々假小屋も無用に相成候得共、近年降不申候、(雪脱カ)今歲は右地震前夜初雪に而、翌日ヶ屋上之雪を拂候事に相成、其後度々雪を拂候事に相成、此節は市中、處に寄り屋上と比しく御座候、貴地之御様子、とんと分り兼候故、御案思申上候、桑名邊も少々高波と申風聞候得共、鳥羽之海嘯は未曾有之大變と承り候、桑名、四日市杯は内海故、左様に無之事に御座候歎、參遠駿之風聞も、殊之外大變と承り候得共、此節之儀故、難信風聞も多く候故、如何と存候、且東國之風聞はとんと分り不申、道中に滯り候歎、何方よりも未だ消息無御座候而、街説許に御座候、

一九月十八日、大坂江入泊之異船、十月七日、豆州下田湊に入候風聞仕候、如何、且昨日比より又々大坂海に異船見へ候杯風聞有之、實説に候はゞ、又々畿内近國之騷に可有之候得共、兎角浮説も多く候故難信候、今年は兩度之地震に人心惱み、且海嘯之厄にかゝり候地は尙更と被存候、弊境杯も此度之地震、邑中潰家、大破損之藏々、餘程之儀に

震災豫防調查報告第四十六號

乙

而、加賀金澤邊迄之消息、大體弊境内同様之事に御座候、

○越前敦賀打它辨次郎、原鹿七々書狀、十二月十四日出、

當地も餘程之地震に而は御座候得共、私共宅は格別之破損も無之、御安心可被下候、當地も潰家少々、怪我人も少々御座候、先月十六日夜、同廿五日、當地邊は稀有之大風に而御座候、當地は、風之障は格別無之候得共、若州小濱、丹後邊は、潰家怪我人も少々有之、丹後に而は死人も少々有之候由に御座候、貴境は風は如何御座候哉、御案思奉申上候、下略、

十二月十四日

原 鹿七

打它辨次郎

○内海友之進、若州小濱之話、

十一月四日、五日之地震は軽く、潰家等一軒も無之處、十六日、雪中に而、六七十年此方不覺大風に而、屋根を吹まき、空より降ることく石を吹上げ、其中に地震も相交り、殊に恐敷次第に御座候得共、右之仕合故、表へ出候儀出來がたく、心配仕居候處、津浪之風聞致し候に付、右之石瓦之降中を危く通り山上へ登候處、其内穩に相成、津浪之儀無之治り候事、

右之大風に而、小濱町方二十軒許家倒れ申候、却而地震は輕

く、大風之方恐敷存候事、

西江州滋賀郡、高島郡、何れも地震輕く、潰家等無之候事、

○井坂傳兵衛旅中日記、

一十一月四日朝五ツ半時、若狹國遠敷郡小濱城下旅宿二階座敷に、檜垣四神主殿は御旦廻人長谷川嘉右衛門と、拙者と二人居申候處、地震に付、早速二階より下り候處、震動烈敷故、家内皆々家外に走り出申候、家土藏建物之動く事、波之うつ様に見へ申候、漸鎮り家内へ這入候得共、夫より幾度となく地震、夜中も得寢入不申候、當六月之地震と此度と、當地に而之輕重如何候哉と尋候處、此度之方烈敷様申候、

一同五日、同郡井之口村御旦廻に行申候、今日も輕き地震は數度有之候内、七ツ半頃大震動、皆々家外へ走り出申候、但し昨日朝之地震とは軽く有之候、今夜も度々地震、少々も油斷出來がたく、得寢入不申候、

一四日、五日後、打つゞき日々晝夜とも輕き地震は數度有之候處、段々薄らぎ、十日比は大に靜謐に相成申候、

一此度之地震、若狹三郡之内、遠敷郡、大飯郡は人家破損等無之、壁など少々破目入候迄之事、三方郡は右二郡方も震動甚敷候而、少々人家破損有之候と承り申候、

一同十六日、同郡大谷村御日廻り、此村に一宿、今夜九ツ時比々戌亥の大風吹出し、至而烈敷、家を動かす事、地震之如く有之、曉方におよび、漸少々静まり申候、老人もケ様之大風は覺へ不申と申候、此村は山寄りにて、風之當てざる處也、夫に而さへ如此に候得へば、平地は嘸々甚敷有之ならむと、皆々申候、

一同十七日、風和らぎ雪降に成申候、大谷村出立、府中村江着、此間道法二里有之、昨夜之大風に所々樹木打折れ、高塚村杯は、屋根は吹まくり候様子に而、屋根の破損せざる家一軒も無之、小屋杯は倒れ有之候、府中村は小濱城下より拾町許東へあたりて、昔之國府之地也、此村之宿は、産神總社明神之別當福泉寺なり、昨夜大風之様子承り候に、誠に烈敷儀、言語に述がたく、一村皆々家外へ罷出、家内に居候者は壹人も無之と申候、福泉寺西向きの中窓之戸障子を吹放ち、其次之處に有之候四枚障子、其次本堂と庫裡と之間に有之四枚襖等、不殘吹飛し、障子の骨はばらばらと相成申候由に候、村々破損之家數多有之、怪我人も有之承り申候、小濱町家二十軒許倒れ申候、大飯郡いぬ見と申浦にかゝり居候三十石積み船二艘、壹艘は破船致し、壹艘は沈みと承り候、但し溺死之人は無之由に候、大風に

而破損之家、大飯郡には無之、三方郡は如何に候哉、いまだ承り不申候、

一同日夕方に至り、町在とも風説致し候は、今夜津波來り可申とて、老人小兒は山寄へ立退せ、或は山寄之村々所縁之方へ立退き候輩、何百人といふ數を不知、其騒動混亂、言語に述べ難く、夜九ツ半時頃に相成、海上大に鳴動致し候故、津浪或は大地震に而も可有之哉と、恐怖致し罷在候處、何之別條も無之、夜明けに相成、安堵致し申候、大坂に而津波に出會候者小濱に有之、今日潮之引方、例よりも過分に有之、天氣之様子も一通り不成候を見請候而、大坂津浪之節も、右體に候ひことなむ申候に付、皆々夫より騒ぎ出し、近村迄も聞傳へ、騒動致し候事之由に候、併平日とは過分之高波に而(候脱カ)と承り申候、○頭書ニ、傳兵衛云、此日津浪は一丈許高く參り候との事トアリ、

一大飯郡高濱之海中に、いかなる猛浪も打越し候事無之大巖あり、此度之高波は是を打越候と、高濱人に承り申候、

○上州山田郡の人、參宮之話、

私事、當十一月六日、國元出立仕候、上州邊は、老人共も是迄覺へ不申候程之地震と申、皆々家を出で、地震を避申候、當國も同時に、四日朝五ツ半時に御座候、但し翌五日之地震

は無之、右四日朝之地震に而、家の損じ候様なる事は無之、道をあゆみ候者は、足元の定らざるをふしぎに思ひ候處、人家又は樹木の動きにより、地震と存候程之事に候、中山道碓氷峠迄は先づ同様、碓氷峠を越、信州にかゝり候處、上州よりは餘程強く、松代などの御城下には潰れ家有之、善光寺は左程之事無之候、木曾街道は餘程強く有之歟、小屋を造り、地震をさけ居申候、夫々津島へ參り候、壞れ家數多有之、驚入申候、夫々伊勢路は御案内之通候との事也、

〔同書〕<sup>六</sup>

○鳥羽廣野破魔助書狀、十一月十三日認、

四日、五日之地震より津浪と相成、命からん、遁申候、併白晝の事故、人死も少く御座候、されども小船に乗候者は、皆皆相果申候、下拙親類は壹人も死なく、此段御安心可被下候、惜しきものは、書物を流し申候、是許残念に奉存候、御城外郭總崩れ、頼母様御屋敷も大荒に御座候、下略、

十一月十三日

廣野破魔助

○兒玉左太夫親類鳥羽家中松田氏々、同所へ之書狀、

鳥羽表も四日朝五ツ半時、迎も宅内に罷在がたき程之地震に而、大道へ出、壓死之難相避居申候處、程なく海上高潮に相成申候、地震に而潮も動き候なるべし、差引もあるべしな

ご申、海面見詰ながら、地震用心致し候内、東北の方俄に鳴動致し、不審に存候内、彼潮襲來り、扱は津浪なりと驚き、高みに登り候處、床上三四尺程潮込入、岩崎下通り之家、不殘潮にひたり申候、其内津波も平常之満ち込と存候程迄引ゆき候處、又ひきかへしみち來り候勢、前々餘程弱く、床下四五寸にて止まり申候、其後二タ浪ほど來り候得共、次第に弱く相成、何れも安堵致し、高みより追々に下り、互に往來に出、打寄無事を賀し居申候處、不存寄又東北に雷の如く鳴動致し、前に懲り候故、何れも武器携へ、遁支度仕候内、津波の勢、以前に十倍致し、其勢ひ中々御はなしに難相成、書面に認るには彌以出來不申、此波に岩崎海邊の屋敷向、不殘流失、山の手の方も流失不致迄に而、何れも潮入に相成申候、平地の家は、棟とても不見、高みの家も軒を浸し申候、拙者屋敷は幸に高く故、流失は不致候得ども、潮入に相成申候、扱追々潮減じ申候、當城内外大荒、絶言語候、丸之内掛塀壹ヶ所も不殘流失、相橋之橋は最初の浪に流れ候、その外米倉を始、大破無申許、町家の狼狽、是亦御はなしに難相成、しかし建連ね候事故、一向に跡方なく流失は七八軒に御座候、在方は流死之者も追々申出候、狂濤をも凌來り候船手之者も、髪を切り、只助命をのみ祈り罷在候、魚も遊びかね候哉、玄

關あるびは納戸の隅に打寄られ、三四尺鱒、尺餘の鱸、王餘魚など、手づかみに相成申候、前代未聞の災變に御座候、

○十二月十一日、射和竹川氏々來書之内、

鳥羽も志摩五十六ヶ村之内、汐不入村廿三ヶ村、宜村柄は濱手之所、皆荒申候、

流失家、八百十二軒、但十二ヶ村、皆流、壹ヶ村、

濱道具流、船流、

壹ヶ村、流失家有之村々者、舟濱道具共添、此村は潮入不申候而流し分也、

地震潰、

壹ヶ村、

田地過半潰、

三ヶ村、汐不入無事之村也、汐入流失家有之村は、此外也、

潮入大破、

拾一ヶ村、

新田大貳所、穴川、舟津、鳥羽、

此外、小新田、潰流失數不知、

米壹萬七千俵程、或は潮入、又流失、

凡右之通に御座候、麥菜作潰之田地は、村毎に有之候、下略、

○十二月、橋村氏鳥羽行之節、見聞之略記、

一楠部村々堅神村迄之道筋は、倒家并損所無之候、

一堅神村々鳥羽へ往來之道、洪波に而五六町崩れ、古道を通

行致し申候、凡三四町之廻りに相成候事、

一堅神村海岸之堤崩れ、今以觀音寺松之近邊迄、潮差來申候、右之松之枝、少々打折候を見請申候、

一觀音寺僧に、洪波之様子承り候處、十一月四日朝五ツ半時

大地震、夫々半時許過、洪波之由也、一の潮、寺の松の木々

少し向まで來る、二の潮同様、三の潮、松の木を越わ寺之

庭迄來る、四の潮にて寺院不殘流失、但本堂は變る、其外は村家東

に有は西に流れ、西にあるは東に流れ、東西之家混亂いた

し、汐干之後、家を尋ね候由也、

一石地藏并手水鉢、五六間外之溝へ流れ落居候よし也、

一鳥羽は、洪波に而潮之上り候家多分に有之候得共、山田一

志館邊程は、損じ家見受不申候、

御城之塀不殘崩れ申候、委敷書附、外に壹冊有之候間、此

處に略す、

○鳥羽城并町在、大地震大洪波に而、潰破損流失之控、

當十一月四日辰之中刻大地震に而、本城其外處々破損、

引續大洪波にて、城内櫓、塀、門、侍屋敷、長屋向、潰、破

損、流失、并町在共潰家、流失、左之通、

一本城櫓并土塀、掛塀、門々、地震に而瓦壁落、破損七箇所、

一二之丸内、地震に而瓦壁落數ヶ所、津浪に而處々潮入大破、

并流失共拾五ヶ所、

震災豫防調査報告第四十六號

乙

一三之丸、地震津波に而瓦壁落、并稽古塲、同道具、木戸門、流失共十ヶ所、同處植込之樹木、津波に而過半轉木、

郭内、

一追手二之門、津浪に而破損、

一同處番所、破損、

一二之櫓、地震に而壁破損、津浪に而内手大破、

一御用米藏三戸前、潮入大破、過半濡米に相成る、

一番所壹ヶ所、流失、

一獻上物仕立藏、大破、

一學文<sup>(間)</sup>所壹ヶ所、大破、

一文庫壹ヶ所、破損、

一稽古所五ヶ所、大破、内一ヶ所、潰、

一馬塲、津浪に而大荒、

一馬具藏并厩、流失、

一米藏二棟、大破、過半濡米、

一藏壹棟、半潰、

一追手水門大破、扉流失、

一同脇水門、流失、

一同上番所、半潰、

一橋落一ヶ所、

一門大破三ヶ所、舛形土塀、掛塀、倒、破損、七拾八間、  
一馬見處壹ヶ所、流失、

一番所流失二ヶ所、

一脇水門大破、扉流失壹ヶ所、

一郭掛塀、不殘流失、

一土塀百七拾間、半倒、

一並木松轉拾八本、

一海手石垣、所々崩、

一脇水門流失二ヶ所、

帶曲輪、

一門押倒壹ヶ所、

一仲間長屋大破、過半流失、

一產物土藏、流失、

一下役所壹ヶ所、大破、

一米藏一ヶ所、大破、不殘濡米、

一作事役所并納屋三ヶ所、流失、

一大砲納屋潰一ヶ所、

一門大破、扉流失一ヶ所、

一水門流失一ヶ所、

一掛塀不殘流失、

一土塀六拾四間、倒、

一柵不殘流失、

一土疊切所六十七間、

一海手石垣、所々崩、

一砲術稽古所、流失、

郭外、

一御船藏入口門番所、流失、

一同上番所、流失、

一同門續長屋、流失、

一御船具入土藏、大破、

一公儀御船納家、海手通打破、半潰五ヶ所、

一中番所、流失、

一御城附御關船納屋、大破、

一松木六本轉、

一砲術稽古調練場一ヶ所、大荒、

一同稽古立場人溜共、流失、

一大砲器械製造場、一ヶ所流失、

一同納屋大破、二ヶ所、

一同番所一ヶ所、大破、

一郭内帶郭、并郭外共侍屋敷、長屋流失、其外潰、破損共九拾

軒、

鳥羽町、

一流失家、

五軒、

一潰家、

貳軒、

一半潰家、

四拾五軒、

一潮押込、

四百四拾壹軒、

一見張船番所流失、

一ヶ所、

一流失土藏、

一ヶ所、

一半潰土藏、

二ヶ所、

一破損土藏、

二十一ヶ所、

一破損家、

六十八軒、

一潮押込土藏、

五十四ヶ所、

一流失納屋、

三軒、

一破損納屋、

七軒、

一汐押込納屋、

二十六軒、

一大小船流失、

七十五艘、但船具共、

一同破損、

拾五艘、

一溺死、

二人、

志摩國之内、四十四ヶ村、勢州領分之内、三ヶ村、

但其餘の村方は、地震に而瓦落、屋根破損、堤地割、

震災豫防調查報告第四十六號

乙

并土藏之類、破損少々御座候、

一堤切壹萬八千三百九十間餘、

一田畑荒高凡壹萬七百三十壹石餘、但未汐高にて、篤き致し候儀は難相分、

一溺死人、

七拾四人、

一怪我人、

二十八人、

一流失家、

五百八十七軒、

一潰家、

百五十五軒、

一破損家、

六百九十八軒、

一半潰家、

二百四拾九軒、

一潮押込家、

二千二百七十壹軒、

一流失土藏、

九拾九ヶ所、

一潰土藏、

三拾ヶ所、

一半潰土藏、

六十八ヶ所、

一破損土藏、

二百貳ヶ所、

一流失郷藏、

三ヶ所、

一破損郷藏、

五ヶ所、

一流失寺社、

拾六ヶ所、

一潰寺社、

六ヶ所、

一破損寺社、

十一ヶ所、

一流失納屋、網小屋共、

三百五十五軒、

一潰納屋、

四十六軒、

一流失年貢米、作徳米共、

三千四百九十五俵、

一半潰納屋、

五十九軒、

一濡米、

千四百三拾貳俵、

一流失粃、稗、五斗入、

九百貳拾俵、

一濡粃、

二百貳拾九俵、

一大小網流失、

二萬千四百五十九帖、

一流失雜穀、

二千八百三拾四俵、

一流失麥、

六百拾俵、

一濡雜穀、

千百七十二俵、

一大小船流失、

千四百三拾八艘、但船具共、

一同破損、

三百七拾壹艘、

一流失荒布、

拾八萬把、

一濡荒布、

三萬六千把、

一潮高さ鳥羽に而壹丈五六尺、村方に寄て三丈餘、或は二丈、中には七丈餘之小山を打越候村方も有之候、

右之通、荒増届出候分、寫取差遣候、其餘所持之品々諸道具等、流失夥敷候、筆紙に盡しがた、餘は御推察可被下候、

○霜月廿三日、さき島の和ぐ竹内萬助話、

四日の津浪に而、和具は家數四百軒餘あり、右之内家數二百



七十軒流失、棟數にしては四百餘也、溺死人は即死三拾六人、跡にて死候もの八人、津波來り候申(と脱カ)より、皆々高みへ遁登り候得共、宅へ歸金銀衣類等取に參り候もの、みなく溺死也、いづれも屈竟の者ごもにて、波位は如何様之波に而も凌ぎ逃れ申候得ごも、家に入道具杯取に參り、家潰れ候に付下に敷れ、皆々死し申候、船數四五百艘有之處皆流失、残り二三十艘なり、

其外

○こしか、七十軒流失、即死人七人、

○御座、○濱島、○なせ田、○かたど、○船越、○波切、

いづれも別條なし

○かうが、和具同様之損じ、

○かう、別條なし、

○伊勢南島古和浦津浪之事、

十一月四日五ツ時過、沖を歸り來る漁船、古和浦口前處兼て運上を取兼て運上を取村役所なり、之前、魚を積並べ、直段を付け居る處へ、大地震に付、各居宅へ走り歸らむとするやいなや、大地を泥を吹出し、沖々山の如き大浪來り、人家之屋根之上を越江、一圓海中に相成、諸人山へ登りこれを避く、尤去る六月十四日地震之時も、津浪を恐れ、諸人山に登り、七八日も山

住居致し候故、此度も地震の初めより、誰教ふることなく、子供より騒ぎ立ち山に登りし故、如斯之天津波にも死人少く、全神の御加護と難有存じ候よし、

一氏神社ウヰヌ并天満宮の社等、海岸に有之候得共、波も參り不申候哉、何れも別條無之段、不思議の事也、海中の島に有之辨財天は、島と共に相崩る、尤此島は元來海底に大巖有之、船行の折々、漕當て破船も有之故、近年右之岩へ築立し小島也、

一人家凡二百五十軒許の浦方に候處皆々流失、相のこり候處、纔二十軒許も有之候、此内神職之家、當時之庄屋之家、寺院杯を始七八軒は、屋敷高き故無難、其外に残り候家は、何も大破損、寔に柱が建て居るといふ許也、

一或壯年の者、其日家に居しが、地震に付大道へ出、また沖の高波を見、家の二階に登りしに、やがて二階へ波來り、二階より家の棟へ浮登れごも、家も浮上り碎けしゆゑ、隣の屋の棟へ遊び付に、是も同じく浮沈み、波に順ひ碎けしかば、山の手を志し泳げごも、高波故心にまかせず、漁夫故、水練は随分巧者なれごも致し方なく、波に隨ひ浮びし沈みつ、既に危き處、漁舟一艘流れ來りし故、右へ取付打乗たり、此船波に覆りたる時、船底へまたがり、又本との

如くかへりたる時は、船べり江つられ、潮につれて次第次第に流れ行き、幸と海岸の山へ流れ寄り、樹木の梢へ取付き、辛くして一命を助りし者も有之よし、

一死人は老年之者四五人、流死中にも哀れなるは、六十餘り之漁師、小船に網を直し居しが、津浪にゆられ漂ひ、やゝ久しく船もかへらず、山に登り居る諸人を手にて招き、助け呉と一時許も叫び居しに、右之妻子など山の上にて是を見、いろく心配いたし候得共、助くべき手段もなく、遂に波の引口に船覆り、空しくなりしを、山の上の諸人、目の當り見たるよし、

一浪引し跡は、泥并砂を打上げ、又は波除け堤崩れ、家はさら也、屋敷地迄も跡形なくなり、又家は海岸の樹木にかゝりとまりたるもありたるよし、

右は、古和浦平三郎といふ者、村之代參に取あはず兩宮江參宮致し、浦の御師中西與太夫へ立寄り話したる趣也、

近浦、大體同様のよし、方座浦は浦方も小きゆる歟、古和浦程には無之よし、今以潮定らず、波高きよし、但し地震は、山田よりは穩に有しよし、

○甲賀之人、參宮にて風宮に候ひに話之由、傳聞之話、

四日に甲賀之漁師、沖へ網を引に參り候處、沖にて潮工合大に違ひ候故、皆々不審に存候得共、折々は如此潮も有之事故、不構網を引居申候處、いづくともなくビユウと申音(上カ)參り、其儘船は皆々山の山へ迄乗上げ助り申候、家は皆々其上を波越へ候得共無難にて、流失は無之この事、右に付、御禮參り候との事也、

右之話、傳聞故虚實不知、

○一之木町多田善右衛門之話、十二月十日聞書、

去る四日之地震は、甲賀手前之山手に而逢候處、餘程嚴敷地震に御座候、夫々甲賀之内橋本と申所へ罷出候處、高潮にてしめり有之、其所を通り候節、二の汐來り候得とも、さしたる事なく、一丈許之潮に御座候、夫々濱田と申處へ參り候處、三度目之津波參り、山へ逃上り申候、右之汐甚敷、二丈許も有之と覺へ申候、山の下に有之細流へも潮満込、其邊乳之下迄つき候中を渡り、山へ逃上申候、山上を遠見仕候處、津浪之起り、其街三三十町沖に而潮濁りも甚敷、夫々沖は浪無御座、青みも平常に不替、唯其儘にむつくりと高く相成候様見へ申候、甲賀は浦方之家少々流失のみ、其外別條なし、尤死人、怪我人、一切無之この事

歸之節、鵜方、磯部へ向參り候處、鵜方は仔細なし、磯部は少

少之荒のよし、

○甲賀村書上、廣辻氏が来る、十一月十日書上也、

甲賀村

一村方領分、去る四日辰中刻頃か大地震仕候節は、土藏古屋等捻潰し、家々瓦落、破損等有之、一同驚罷在候處、無程潮高満と心得候内、津波村方へ押寄候事五度、就中、三度目干去る事平常とは甚だ遠く、六七十間も餘計に引去、是は津波と彌驚候處、丑寅之方々白浪十重廿重に打重り、如矢押掛け、一時に村里中一面に押流し申候、未之刻に至り、浪少々干口に相成り候節も、村田共一圓之海に相成り、夕方に至り、漸々鎮り申候、磯際に而浪高さ凡三丈五尺、浪先凡拾七八町來り申候、右に付御見分被下置候處、左之通に御座候、

- 一流死人、拾壹人、
- 一流失家、百三拾四軒、
- 一同隠居、五拾九軒、
- 一同納屋、百二十八軒、
- 一同土藏、三十壹ヶ所、
- 一大潰家、拾壹軒、
- 一半潰家、二十九軒、

- 一半潰隠居、六軒、
- 一半潰納屋、五軒、
- 一半潰土藏、四ヶ所、
- 一流失地藏堂、壹ヶ所、
- 一流失毘沙門堂、壹ヶ所、

外に

- 流失番人家納屋、貳軒、
- 田所堤切之覺、六十間餘、
- 一字池田堤、三十間餘、
- 一同處川堤、三十間餘、
- 一同處一の坪堤、拾五間餘、
- 一同同ふり堤、百五十間餘、
- 一同前田潮除け堤、四拾間餘、
- 一同處川堤、七拾間餘、
- 一同下新田堤、大荒、
- 田所砂入荒れ之覺、同斷、
- 一字同ふり田所、砂入、
- 一字一の坪田所、大荒、
- 一同清水田所、
- 一同池田田所、

震災豫防調查會報告第四十六號

乙

一同丸山田所、大荒、  
 一同大口田所、同斷、  
 一同目墨田所、砂入、  
 一同加子方田所、同斷、  
 一同大谷田所、同斷、  
 一同禰宜田々所、大荒、  
 一同江畑、同斷、  
 一同池端田所、同斷、  
 一同前田々所、大荒、  
 一同廣田々所、同斷、  
 一同雀岡田所、同斷、  
 一字内田々所、同斷、  
 一同井戸田々所、大荒、  
 一同石田々所、砂入、  
 一經塚田所、同斷、  
 一同龜井田所、同斷、  
 一同杭手田々所、同斷、  
 一同山井成子田所、同斷、  
 一同水尾田所、同斷、  
 一同丸岡田所、同斷、

一同石之前田所、同斷、  
 一藤井田所、大荒、  
 一同四反田々所、同斷、  
 一同藏開戸畑、同斷、  
 一同岡畑、同斷、  
 一同仲田々所、同斷、  
 一霜田々所、同斷、  
 一同沓張田所、同斷、  
 一同小迫間田所、砂入、  
 一同兵部田所、大荒、  
 一同江畑、同斷、  
 一同清水後畑、同斷、  
 一同大門田所、同斷、  
 一同四町田所、同斷、  
 一同立相田所、砂入、  
 一同五反田々所、同斷、  
 一同福岡畑、大荒、  
 一同西浦田所、同斷、  
 一同鴻かす田所、砂入、  
 一同堂後田所、同斷、

一同口田々所、  
一同水開田所、  
一同山添田所、

同斷、  
同斷、  
同斷、

反畝×四拾町五反程、

一流失御年貢米、

後藏三拾俵、

一同御詰米、

二百三十俵、

一同粃詰穀、

六拾俵、

一同粃種、

六拾九石六斗、

一流失米、

八百俵餘、

一同唐黍、

百六十三石六斗、

一同蕎麥、

百五拾九石、

一同大豆、

二百六拾俵、

一同麥、

六百俵餘、○原本、次行ニ一  
行程ノ空白アリ、

一流失いさば、

二艘、

一同さつば、

九艘、

一同鯉船、

五般、

一同ちよろ船、

百三拾艘、

一同地引網、

二丈半潰、(帖)

一同楯網、

二千五反、

一同口荒布、

十六萬餘、

一轉木、

二百本餘、

右之通に御座候、以上、

甲賀村百姓總代

嘉永七年寅十一月十日

興吉

同 久兵衛(兵カ吉カ)

同 蔵そ

同 肝養源 蔵

同 勇 蔵

庄屋 八左衛門

同 庄太郎

○熊野長島江見舞に參り候人歸宅に付、話之由傳聞、

長島八百軒許之處、津波に而流失、漸八十軒殘る、地震之節、六月之時も濱邊江出候に付、此度も濱邊へ逃出候處、長島壹里許沖に有之候大島紀州御留山なり、と申島山あり、此島も埋れ候程之波參り候に付、津波と知り、皆々山へ逃上り助り候よし、其内宅へ蒲團など取に參り候者、溺死致し申候、廿三人許也、其後に海底へ小碇之如き物を入、死骸等引上げ居候由、死骸は日を経候故歟、皆々髪はなく、死骸一つ上げ候得者、貝を吹人を寄せ、所縁の者引取候よし、

○攝州西宮神職庄司源之進之話、十二月十四日來、

但し四日、五日地震、津波之節は、熊野木之本に罷  
在候よし、

尾鷲浦津浪之節、出後れ候者、夫婦手を引波に漂ひ候處、木の枝の流れ來るに取付、流れ行しに、一里許沖なる小島に流れ付、急ぎ其島に登り助り候得共、其儘氣絶致し居候處、折節漁船參り候に付、其船へ助け乗せ、種々致介抱、漸氣が付たり、其者手に木の枝を握り詰め居申、夫を放し候様申聞候處、是はおせう女房の名の手なれば離しがたく候と申、少しもはなさず、それは木の枝なりと段々申聞、漸氣が付放し候、是は最前夫婦手を取り出候處、途中に而手を持替候様覺江候、其節女房は流れ候事と存候よし、氣が付て後話し也、其者今に病氣にて打臥居申候よし、

又不思議なるは、島勝浦と申處、六、十歳之小兒三四人、船に乗遊び居候處に、津波參り、其儘六七町奥なる氏神の社江流れ付、皆々其社壇へ飛下り候處、船は直に引去り碎け候由、然るに此社少しも難なく、小兒共皆々無難に助り候よし、此度之地震、津波にて、熊野邊にて潰れ流れ寺院は數多に御座候得共、神社の向、日比靈現あるは、一ヶ寺も流失、損じ等も無之、誠に不思議なる事と申居候由、

○妙見町徳田又左衛門、熊野方來書、十一月廿日附、當月四日晝五時半時、四方山鳴り出、煙り立大地震、間もなく大波湧出る、或は高さ三丈許、或は一丈半、二丈の所も御座候、

同五日七時半時大地震、潮干る事廿町許、又津波來る、其夜四時半時大地震、跡に而鳴動甚しく、大山の崩るゝごとし、此時本意(宮カ)を請川江之間之山崩れ込、船にて九里八町之處、通船止り候よし風聞御座候、

一長島浦、私共出立の跡にて七分通り流れ候よし、

一三浦、家數七拾軒之處、廿四軒許殘る、其餘不殘流失、溺死五人、此處にて私津波に逢申候、山へ逃登り、辛じて命を助り申候、

一尾鷲浦ヲハセ、八百軒許之處、百五十軒殘り、其餘流失、溺死五百人餘、

一三木里、濱邊之家皆流、

一曾禰之家、皆潰れ申候、

一二木島、八分流失、

一新鹿アラシカ、大泊り兩村共、八分通流失、

一木之本、無難、

一濱宮、口宮と寺許殘る、人家皆流失、溺死五人、

一天滿、潰家多分あり、  
 一私居申候古座浦、六十壹軒流失、  
 今月廿日迄日々ゆり、いづ方も山住居、當地か上邊も同様に  
 御座候、下略、

熊野古座浦か

十一月廿日

徳田又左衛門

一入鹿組は無難之儀と奉存候、山之石崩れ落、通路止り、委  
 敷儀不相分候、

一新宮は、潰家相見へ申候、

一四日之津浪は、長島か木之本邊まで廿里許の間也、五日之  
 津波は、勝浦、太地浦邊タイヂか大坂迄なり、

一此大變より、熊野所々の温泉も涌出ず、是迄水多き谷川も  
 水無之様に相成、此度如何あらむと人々心配仕候、

○長島浦并浦々、地震聞書、

一十一月四日四ツ時大地震、皆々大に驚き、往來へ出、家毎  
 に火桶火鉢等取出し、火之用心之氣を附居候内、沖之方か  
 津波之由呼り候故、取物も取あへず山へ登り候由、當六  
 月大地震之節は、山へ登り候得ども、津波之様子も無之  
 故、此度は濱手へ出候者も多分有之、其内に大病人等之手  
 をひき、濱へ出候者は、俄に津波故、夫を助け山へ登り候

間も無之、夫を助け居候而は家内中流れ候ゆゑ、みすく  
 病人を流し、辛くして自分の命を助り候者も有之、又盲人  
 等も流失之内に有之、彼是死亡人は二十三四人も御座候、  
 當長島浦は家數九百軒餘之處、四五百軒許流れ候、其餘り  
 残り候處家々も、大體床より七八尺許は高潮上り、残り候  
 土藏も壁も、壁は潮の登り候處より腰通り壁落居候茂多  
 く見請申候、右流失之家は、漸く一命を助候而已に而、金  
 錢并諸道具はいふに及はず、衣食に至る迄、海上に浮み流  
 れ行候を、唯山より詠め居申候許なり、

一二郷村は、地震も聞より皆々津波もあらむかと多勢遁れ  
 出候者、橋の處に而高潮來り、橋流れ落候故、拾八人許怪  
 我人出來候由、

此度二郷村は、二つに別れ居、壹方は往來に而地續き、  
(衝カ)

一方は離れ島同様に而、細き土橋を涉り不申候而は難  
 行處に御座候故、皆々にげ出、船に乗候者は、船と船の  
 打合に而流死、却而老人子供等、早速逃兼候者は、皆々  
 無難に有之、中には子供も少々交り仕候得共、多く壯年  
(居カ)  
 之者流れ候旨申しに御座候、家損じは一向無之候、

右二郷村之人、津波後十日許相過、沖合に而拾五六歳之女  
 子を拾ひ來り、右日敷を經候得共息も有之候故、同所御

番所へ連來り、追々養生爲致候處、此頃は順快之由、併し言語は一向いまだ不相分故、何村之者とも今以しれ不申候、

一長島浦流れ家の諸道具金銀等、多分に西手の海岸へ流寄候を、其邊之者夥敷盜拾ひ候者有之、此頃若山木の本御代官所へ御出役にて、右拾ひ候者、嚴敷御吟味御座候由、

一錦浦も同様津浪、右同村賄役之者、地下中より金二百兩預り居候故、右金子を失ひ候而は村方へ不相濟故、家江歸り金子取出し候内、其家流れ候故、漸く家の棟へ取附、其儘流れ行候處、同村社の森の松へ取寄、夫迄は金子も手に持居候得ども、松につられ候内金子取落とし、漸く命許助り候由、此村三百軒餘之處、四十軒許流、

一桂浦、大體不殘流失に而、屋敷跡へ大池出來、人怪我少々有之、

一三浦、是も過半流失、人損じ少々有之、此村、海岸流れ候品を船にて探り居候を見請申候、

一海野、古里邊は、少々のいたみ、

一白浦も百軒許之處、四十軒許流る、残り候家も、只家の棟の有之而已に而大損じ、無難の家は十軒許之よし、

一尾鷲浦は、人家大體不殘流失、人損じ四百人許之由、今に

人損じ之數は不相分候得共、凡の見積、

一長島にて嘶しに、五日之夕の地震は其敷候得共、津浪は四日許之よし、此夜などは西の邊に而鳴動甚しく、小屋に住居候者も飛出し候程之事の由承り申候、地震兩三日前より、大に潮時之刻限損じ居候由、津波は地震止み候とつゞきて三度來り候由、壹番の波に而大體人家流れ、貳番の波は眞に大に而、高さ凡十五六丈も御座候由、三番の波は大に軽く、夫よりして後は一向に穩に有之候、津波は沖にて軽く、只岸際を俄に吹出し候様の物の由、日數十五六日之間、潮漫々としてさし引も揃兼候得共、漸々此頃に至り、平日之並相成候、往來筋之田杯は、今に地方壹二尺宛水上り居申候を多く見受申候、是迄とは海の潮全體に相増と相見へ申候、長島組の浦々にては、此度の損じは、第一尾鷲、第二長島、第三番は桂村、錦浦之邊之由に承り申候、皆々山へ小屋を掛、爰兩三四日前か少々づゝ家跡へ歸り、小屋がけを致し居申候、漁方などは、今に不殘山住居に御座候、山田に而嘶し候々は、現に見受候得ば、眞に大荒にて哀れる事に御座候、旅宿土藏内へ疊三疊敷きもらひ、其上荷物等も置、僕と兩人、口夜程止宿仕候、宿主人の嘶しを荒々書留申候、



十二月十五日

藤原主人吉篤

此聞書は、長島浦は藤本氏の壇所なるによりて、十二月十日山田發足にて、藤本氏彼地江見舞に參られ、同十五日夜歸宅なり、彼地にて物語を直に筆記せられたる實記なり、

大日本地震史料 卷之二十 終